
古の魔女

幻影

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

古の魔女

【Nコード】

N6782Q

【作者名】

幻影

【あらすじ】

「——ふああ。よく寝た」死んだはずの【月影の魔女】は目を覚ました。五百年の時を越えて。命を掛けて世界を救った非常識の塊である少女の、その後の物語。「え？ 何で私生きてるの？」

シリアスなのは最初だけ、基本コメディーなファンタジー、のほろほろが段々シリアス化していつて。更新は不定期&亀更新（目標は週一）です。番外編は暗いのが多いので注意。人外多し。恋愛要素皆無。最近作者はよく消えています…

1 全ての終わり（前書き）

言い訳は後書きに。

楽しんでもらえれば幸いです。

1 全ての終わり

「——このことも、もうお別れだね」

ふわり、と少女は笑った。ただその笑みは、儚さと哀しみと決意を含んだ、とても脆いものだった。

黒く長い髪を吹き付ける風が揺らし、同じ色の瞳を涙を堪えるように閉じた。星の瞬く夜空の下で、少女は思いを馳せる。

それは何者にも理解できぬほど超越したものであり、同時に誰もが思う故郷へのものでもあり——そして誰にも訪れる、自身の死への哀愁だ。

『……いいのか、ルーナ……我が主よ』

少女に声が届いた。それは闇から響くものであり、闇の声だった。少女の隣に青年が立つ。異様な闇の気配を孕む、黒い青年だった。瞳だけが鮮やかな鮮血の紅で、それ以外は闇か夜としかいいようのない漆黒。

凶眼とも言える目付きをしていたが、よくよく見ればどこか憂いを帯びていた。

「うん。誰かがしなくちゃいけないことだから」

『それは、お前でなくともよいはずだ。私がしても……』

「駄目だよ。闇で包んだりしたら、ノクスが瘴気に吞まれるよ」

ね、と少女は自身より背の高い青年を見上げる。青年は何かを言おうと口を開いたが、止めた。

無駄なのだ。何を言おうと。誰も少女を止めることなど、不可能なのだ。

——愛しい者を黙って死地へと送り出すことしか、青年にはできないのだ。

少女は稀代の魔女であつた。

世界は瘴気に満ちていた。理由ははっきりしていた。突如世界の光を保っていたはずの神殿が崩れたのだ。

そしてその理由もまた、すぐに判明した。

その時神殿からは瘴気が溢れた。本来光を内包していたはずの神殿は、すぐさま瘴気から生まれた魔物の徘徊する魔窟と化した。まだ光の力を持っていた神官たちは死者を多く出しながらも、神殿の最深部である地下に向かった。古の時、神から与えられた【世界の光】が安置されていた場所だからだ。

唯一生きたままその場所へと足を踏み入れた神官の長は、その光景を目にして絶句した。

【世界の光】が、溢れんばかりの白い聖なる輝きを放っていたはずの宝珠が、禍々しい黒く鈍いものへと変化していたからだ。

その正体は、稀代の魔女であった、【月影の魔女】と呼ばれていた少女によって明らかとなる。

何もわからないまま帰ってきた神官から話を聞いたその国の王が、少女を呼び出した。誰よりも強く、そして誰よりも多くの知識を持つていた少女ならばその正体を掴めるだろうと、そう思っていたことだった。

少女は言う。それは長い間蓄積されてきた、【世界の光】ですら清められなかった人の邪心だと。それが光を覆いつくすほどになったのだと。

全ては人が引き起こした災厄なのだと――

「いいんだよ、これで。私が瘴気に吞まれた宝珠を破壊すれば、全て終わるんだから」

少女は稀代の魔女だった。彼女ならば、瘴気を今も放ち続ける宝珠を破壊することも可能だった。

そう。彼女の命を掛ければ、破壊することも可能だった。

宝珠は元々神から与えられたものだ。本来ならば壊すことも難しい。そのためにここ数年間、人は何もできなかったのだ。少女はその方法を探し続け、そして見つけた。

自身の全てを犠牲にし捧げることで圧倒的な破壊力を持つ、そん

な古代の禁じられた呪術を。

『……私には、何故お前でなくてはならぬのが理解できん』

青年は闇だった。【世界の闇】そのものだった。

本来は人であつた彼は、古代に生きていた。今から遙かな時を遡る、そんな時代に生きていた頃は彼もまた人間だった。

彼自身ほとんど覚えていないことだが、彼は自身の力に溺れた拳句、光と同じように神から与えられた【世界の闇】に吞まれてしまったのだ。

幸か不幸か彼の力と意思は強すぎた。完全に闇に溶けることもなく、しかし人のまま死ぬこともなく、一体化してしまった。

それから時は流れ、彼は少女と出逢った。

——貴方はここに在るよ。それじゃあ不満？

自身の存在すらも闇と等しくあいまいになってしまっていた青年に、少女はそんなことを言い放った。

出逢いの理由など忘れてしまっていたが、その時の会話だけはよく覚えていた。饒舌にべらべらと喋った後に、少女はそう言った。そして彼は、救われた。

「理由なんてないよ。でもね、これは、私が選んだことだから」

青年は少女を止める術を持たなかった。だから青年は、せめて少女の意思を尊重したかった。

ああ、また、私の存在理由がなくなるのか。

「——じゃあ、ね。ノクス。……さようなら」

もはや神殿の面影もない魔窟へと、少女は走る。

最後まで、涙だけは見せなかった。

青年は何も言わない。目で追いかけることすらしなかった。

ただ、その胸中には、虚しさが広がっていた。

『私は……、私は』

完全に少女の姿が消え、もう何も見えなくなった頃に青年は呟く。

一切の表情がない顔に、つう、と涙が流れた。

それは、【世界の闇】となってしまった彼が、始めて流した涙だった。

『お前から、別れの言葉など聞きたくなかった——』

そして世界は、

救
わ
れ
た。
。

1 全ての終わり（後書き）

他の連載ほったらかしかよと言いたい方は土下座して謝らせて頂きます。ええ、謝りますとも。

はじめましてな方にははじめまして。他の作品も見えて頂いたことがある方にはこんばんは（？）幻影です。

いやあ、何してるんでしょうね。他も終わってないくせにね。あはは。

プロット何それおいしいの状態で進ませていただきます。あくまでも（ここ重要）【竜の園】優先の投稿になりますので、恐らくかなりの亀更新になるかと。

それでも読んでやるぜ、な心の広〜いお方は宜しくお願いいたします。

シリアスなのは最初だけ、です。後々ほのぼのコメディーになるかと。

うん、なるかなあ。なればいいかなあ。なったらいいね。（超弱気
それでは、楽しんでいただけるよう願って。

2 そして物語ははじまる

夜が明けた。

青年は昨晚から一步も動いていなかった。人ではないため、睡眠など不要だ。

辺りを覆っていた瘴気は消えている。本来瘴気は強すぎる未練や悪意や、そんなものがなければ存在することすらも難しいものなのだ。宝珠がなければ。

今頃国では祝杯でも上げているのではないだろうか。少女が身を呈^{てい}して宝珠の破壊に当たることを王は知っている。そして瘴気は消えていつているのだ。おそらくはそうなのだろう。

くだらない、と青年は思う。少女が守りたかったのは一部の者と世界だけだ。そして護れる者も少女だけだった。それだけだ。

青年はふと殺意を覚えたが少女がそんなことを望まないことは知っていたため、止めた。

そしてそれと同時に、違和感に気付いた。

『……？』

少女の魔力が、残っている？

そして青年の思考はある可能性を見つけ——神殿へと向かう。

それは青年には珍しく、とても焦った様子で。

神殿は荒れ果てていたが、瘴気の消失に伴い魔物の気配も消えていた。本来の光が残っていれば青年には近づくこともできなかっただろうが、瘴気に吞まれそれもなかった。

青年はただ、少女の向かった地下へと急ぐ。何も考えられなかった。

そして開けた場所へ出た時、彼は立ち止まった。

青年の視界に映るのは、少女。

そしてそれは亡骸などではなく——確かに、生きていた。

『ルーナ……？』

散乱する宝珠の欠片の中心で横たわる少女からは、弱々しいながらも微かに規則的な呼吸音が聞こえる。それはそこに確かな命を感じさせた。

生きて、いる。

青年は少女を抱きかかえ、神殿を出た。

向かうのは少女が帰る家だと言っていた、塔だ。

恐らくは、少女の魔力が強すぎたのだろう。呪術の失敗かとも思ったが宝珠は確かに壊れていたし、少女が失敗など犯すはずもない。きつと、魔力が強すぎた所為で命を掛けることなく宝珠の破壊に成功したのだろうと、そう青年は思った。

塔に辿り着いた青年は、乱暴に足で扉を蹴り開ける。両手が塞がっているが、他にも方法はあるであろう。

がんつ、といい音を立てて扉が開き、青年は我が物顔で建物に入る。

「——誰だよ、ここは【月影の魔女】の……!？」

『邪魔だ、退け』

いきなり入ってきた青年に、奥から飛び出してきた少年が声を荒げる。が、その少年も青年の腕の中で眠っている少女を見、言葉を止めた。絶句という方が正しい。

少年は緋色の瞳を驚愕に見開き、横を通り過ぎていく青年を見ていたが、ふと我に返り青年を追いかける。

少年は銀髪に緋色の瞳を持っていた。よく人間離れた容姿だと言われるが、実際それは間違っていない。

少年は人間ではない。【月影の魔女】が、少女が作り上げた魔法人形だからだ。

ただ少年は確かに、魂を持っていた。

本来ならばありえないことなのだが、少女はまったく気にせず手元に置いた。

そんな少年は、闇である青年と同じく主をなくすと絶望していた一人だが——

「待てよっ！ な、何でルーナが……!？」

『うるさい。私も知らん』

青年は慌てふためく少年のことなど眼中にないようで、視界に入れない。またもや扉を足で開き、入る。

そこは少女の寝室だった。青年は先ほどとはまったく違い、丁寧に少女を寝かす。

少女はまったく動かない。ただ呼吸音だけが聞こえる。

「生きてんだよな……？」

『らしいな。ただ、目を覚ますかどうかは別だ』

死ぬはずだった呪術の行使。魔力の極限までの行使。それらを踏まえると、目を覚ます可能性は遥かに低い。

だが二人とも、目を覚ますと確信していた。

理由を述べることは不可能だ。だが二人共が口を揃えて言うであろう。

それは彼女が【月影の魔女】だから、と。

『短くとも数百年は目を覚まさんだろう。魔力が回復すれば、あるいは』

「……なら待つ。俺はこいつに作られた人形だから」

そのためならば、高が数百年ほどの歲月などどうでもいい。

少年は人形だ。魔力が尽きぬ限りは停止しない。少年は自力で魔力の蓄積が行なえるし、数百年ほどならば体が痛むこともないだろう。それは最高峰の技術で作られた青年だからこそだ。

『私は、眠る。人にとっては忌まわしき身だ』

本来闇も光も二極の存在ではない。闇は呑み込み、包み込むものであるし、光は輝き、拒絶するものだ。

だがいつの時も、闇は忌まわれる存在だ。

「そうしろよ。俺はここを護るからなっ！ 来るなよ！」

『——ああ、そうさせてもらう。後は頼んだ』

少年は青年の言葉に目を見開いたが、次の瞬間には青年はいなくなっていた。青年は闇そのものであるためにその行動には驚きはしなかったが、まさかあの男が頼むなどと言えるとは知らなかった。

「……あいつに頼むって言わせるルーナってすげえ……」

かなりおかしい部分に感心しながら、少年は自身の主の顔を見て、そして笑った。

ああ、やっぱり、死ぬわけがない、と、そう思っ

そして、五百年の時が過ぎ——

1 魔女の疑問

「——ふああ。よく寝た」

少女は目を覚ました。

見慣れた部屋に、見慣れた風景。しかし、少女は違和感を持ち、まだ覚醒していない頭を使い考え、そして——

「え？ 何で私生きてるの？」

思い出した。

少女は死んだはずだ。命を掛けて、世界を救ったのだから。けれど少女は、生きている。

「あれ？ おかしいなあ。変わったことはないし……」

自身の体を確認する。特に異常はない。

まるで今までのが、世界が危機に瀕したなど、全てが夢に思えてくる。しかしあれは確かな現実だったはずだ。窓の外を眺めるが瘴気など気配も無い。

あれ？ と少女は首を捻るばかりで、何が何だかさっぱりだ。少女は考えるのを止めた。ひどく頭痛がする。まるで体が思い出すことを拒否しているように。

立ち上がり、扉を開ける。何だか体に力が入らないので大きく伸びをした。だがやはり痛むわけではなく、熱を出して寝込んでいるときのような、ただ単に体に力が入らない状態だ。

螺旋階段はここが塔であることを思い出させる。元々この塔は古い魔術師のものだったらしいのだが、誰もいなかったために少女が無断で使用している。本当は白骨死体が転がっていたのだが。

ここはもう少女の家だ。少女の、帰る場所だ。
目を覚ましたばかりのはずだが、何故かとても懐かしく思う。

「おゝい、ノクスー？」

少女は相棒とも呼べる青年の名を呼ぶ。青年は闇だ。どこにでもあり、そのためどこで呼んでも返事を返すはずなのだが、返事はない。

少女はますます首を傾げる。疑問は尽きぬまま寧ろ増えるばかりだ。

階段を下りていくと、人影が見えた。その影は少女の足音に気付いたのか振り返り、そして――

「っ！？　る、ルーナか……！？」

ただだ、と近寄ってくる影にルーナは後ずさりした。
いや、しようとした。

目覚めたばかりの体は思うように動いてくれなかったらしく、ずる、と後ろ向きに倒れる。

「わあああつ！」

「おい、ちょ、まっ……！！！」

ルーナは咄嗟の判断で、反射的に影を捕まえて自分より先に床に激突するように仕向けた。頭を打ったのか嫌な音が聞こえ、その後にルーナが上に落ちる。もちろん下に人がいるためルーナはボスツ、と空気による間抜けな音がするだけで済んだ。

……ぐき、という嫌な音は聞かなかったことにした。

「……ごめんね、大丈夫？」

「……会って早々これかよ。まったく……」

素早く、それこそ何故先ほどその動きができなかったのかと言いたくなるほどの速さでルーナは退いた。流石のルーナもこれ以上の失態は犯したくない。

いてえ、と頭を抑える影、もとい青年をルーナはまじまじと観察した。銀髪と緋眼は見たことがあるが、もっと小さいはずだ。ならばここにいる青年は誰なのだろう、とまた首を傾げた。

「おいおい、まさか「誰？」とかきかねえよなあ？」

「……誰？」

聞いた。

青年は頭を抱えた。

「ひでえ。酷すぎるぞ、こいつ。ずっと待ってたつーのに」
「？」

青年は溜め息を零しながら立ち上がる。ルーナを見下ろす形になるのは、ルーナが小さいからだ。

ちなみにそれを本人に言つと殺されるので注意が必要だ。

「忘れたとは言わせねえぞ。お前が生涯でたった一体だけ作った、

最高の魔法人形なんだからな！」

ルーナは数秒沈黙した。

（あれ私の作った魔法人形はもつと小さかったっていうか魔法人形が成長なんてするのいやでもあの子魂ある規格外だしなあでもそんなことって？ あるのかなあどうなのかなあ滅茶苦茶気になるなあ本当にそうならもう一回解体して中身を調べたいけどそんなことしたらなあでもしたいしなあでもでも——）
混乱していた。

本来魔法人形は成長などしない。もちろん体が生き物とは違うからだ。

核の魔石に魔力を供給することによって魔方陣を発動させ、その魔方陣の効果で動くのが魔法人形だ。成長などするはずがない。

が、ルーナの作った人形は別だ。この人形に組み込まれた魔方陣には人に限りなく近いものを、とルーナがありえないほどに膨大な魔法を組み込んだのだから。理論上可能だが魔力量の問題で成しえなかったものを、ルーナはやってみせたのだ。

しかしやはり魔法人形というべきか、成長スピードが人の数千倍であったため、ルーナが気付くこともなかっただけで。

「お前さ、考え始めると自分の世界に入るの止めるよ」

「……本当に、私の作ったノワルーナ？」

ルーナは自身が付けた名を呼ぶ。にやり、と悪戯な笑みを浮かべる青年はやっぱり、自分の作った人形だ。

子憎たらしく自由奔放で、でも本当は優しい、ノワルーナだ。

ちなみにルーナの頭から「魔法人形は作り手に似る」という情報はすっかり抜けている。

「ノワだ！ 凄い、成長してるーー！」

「あつたりまえだろ？ 何せ五百年も経てばなあ」
「は？」

ルーナは凍る。

そんなルーナに変なものを見るような視線を向けて、ノワルーナは言う。

「ああ、気付いてなかったのか？ お前が宝珠を破壊してから五百年後だぞ」

ひくり、とルーナは口の端を引きつらせた。

1 魔女の疑問（後書き）

話がどうでもいい方向に進んだり突然変な方向に行くのはご愛嬌。

2 魔女の人形

久しぶりに太陽の光を受ける。やっぱり寝すぎはよくないと切実に思った。

寝ている間に五百年も経過するなんて、いいはずがない。

「——って言っても、生きてるだけでいい方だけどね」

ルーナは結構強かった。

ルーナは机に向かっていた。幼い少女が大きな紙に奇怪な文字を並べていく様は奇妙だ。

行なっているのはあの呪術の解明である。命を掛けるはずのそれは、現にルーナの命を奪ってはいない。それに対する論文だ。大変研究熱心な魔女である。

ノワルーナはそれを形容しがたい表情で見ていた。

「起きてすることがまずそれかよ……」

「だって、人は忘れていく生き物なんだよ？　呪術の衝撃の所為か発動時の記憶がないし」

古代文字をさも普通の言語のように操るルーナは、まさしく天才だった。古代文字は本来解読することすら難しいものののだが、ルーナはほぼ完璧にそれを理解していた。何故ならばノクスという教師がいたからである。

ノクスは元々人間だ。人としての記憶は忘れてしまっているが、知識は古代のものから闇としてみかなりの歳月を彷徨っているため豊富だった。本来古代人の言語であるため、当たり前前に古代語を操る。

「体に異常はないんだけど、明らかに魔力量が減ってるんだよね。ああ、底なしと言われた私の魔力う」

うう、とわざとらしく言ってみる。実際ルーナの魔力は落ちていた。それこそ自分が作り出したノワルーナよりも、だ。

今なら下克上もできるかも、とどうでもいいことをノワルーナは思う。

「いやいや、前が異常だったただけだからな、お前の場合」

そうなのだ。底なしの魔力などあるはずもない。

だがルーナの魔力は底なしとしか言いようがなかった。

「ま、いいけどね。そだ。そういえばノクスはどうしたの？」

気になっていたのだが、五百年発言に驚愕して忘れていた。

相棒、主従、友情——当てはまる言葉があるかも怪しいルーナとノクスの関係は、曖昧だったが強固だった。契約を成したわけでもないし、永い時を同じく過ごしたわけでもないが。

そう。二人の関係を表すのに最も近い言葉は、正確ではないが執着なのだろう。もしくは依存だ。

ノクスは独りだった。彼は闇だ。【世界の闇】なのだ。本来光を好む生き物とは相容れない存在。だがルーナは違った。恐れるわけでも敬うわけでもなく、ただそこに在るとして扱った。ルーナの前では全ては等しく平等だった。

ルーナは異端だった。底なしの魔力、異様なまでの好奇心がもたらした豊富な知識、人としては珍しい達観した思考。そして何より、その漆黒の容姿。人でありながら人とかけ離れていた。

そんな二人がお互いを求め合うのは、何ら不思議なことではない。ただ、ノクスの執着は異様だった。元々何もかも、自分すらもどうでもいいと切り捨てるような性格だ。彼にとって重要なのはルーナだけであり、他はどうでもいいのだ。

「あいつは寝た。ルーナをここに連れてきてからずっとな」
「寝たって……。まあ、それもそうか。私と会った時も寝てたもんねえ」

ノクスと出会った時のことを思い出し、納得した。ノクスは外界との接触を嫌う。

なるほど、寝ていたから返事をしなかったのか。これはまた深い眠りにについていると思われる。

これは直々に、叩き起こしに行くべきか。

「でも、魔力も落ちてるしねえ。ノクスは逃げないしまった今度でいいつか」

ノクス、見捨てられる。

ルーナとしては五百年も経っているの、外界がよく理解できないままノクスの下に行くのも憚られた。それに頼みの綱のノワルー

ナは片時もルーナから離れなかったために五百年が経過していることしか知らないのだ。

肝心な時に役に立たない。

「おい、何で俺の顔を見て溜め息を吐くんだよ」

「いや……。ま、いいじゃん。一ヶ月くらいは様子見つてことで」

魔力も少しは戻るかもしれないし、と言葉を濁す。そして呪術の説明を続けた。

怪訝そうに考え込むノワルーナも、すぐに止めた。

日は暮れかかっているが、ルーナはそれどころではなかった。

「あのね、ノワ。私は化け物でも何でもないんだからね」

危機だった。ルーナは珍しく焦っている。

何故ならば、
ぐるるるる。

「今までは寝てたし、ノクスが何かしてたみたいだけどね？ 私は生きてるんだよ、お腹も減るんだよー！ー！！」

盛大に腹の虫が鳴り響いた。

ノワルーナは魔法人形だ。基本的に睡眠も食事もない。そんな彼が食料など用意しているはずがなかった。

怒鳴られたノワルーナは本能的に塔を飛び出す。頭では今はルーナよりも強いことは知っているが、昔の「お仕置き」に対して本能が反応した。五百年経っても忘れることはない「お仕置き」は賞賛に値するだろう。

ともかく、ノワルーナはルーナの下僕だった。

「あ、魚介類がいいー！ー！」

注文も忘れないルーナだった。

2 魔女の人形（後書き）

活動報告も同時に上げております。

3 魔女の思考（前書き）

何故かエセシリアスに持ち込みたがる駄目な作者。
ほのぼの目指してるのかシリアスにしたいのかよくわからないとい
う悲惨な状況。

誰か叱ってやって。でも作者はガラスのハートじゃなくて寧ろボロ
ボロ障子なハートの持ち主なので取り扱い注意。

3 魔女の思考

「——んー、ノワ、おかわりい！」
「あー、はいはい」

だるそうなノワルーナを無視し、ルーナはおかわりを要求する。
まったくもって我が儘な主だとノワルーナは心の中で呟いた。

ルーナの前には、豪華な海鮮料理が並ぶ。と言っても海で漁ってきた魚や貝を捌いて並べただけだ。料理などできるはずもない。
だが新鮮な上実はかなり希少なものと混じっているため、生でもかなりの美味だった。無論そんなことを気にするルーナではない。

「でもやっぱり五百年だねえ。生態系でも狂ったかな」
「おい、食いながらそんなことを考えてたのかよ」

ルーナは箸で器用に白い貝を掴んで頬張る。もちろん味わって食しているが、五百年の所為か少々変わっていたのだ。ルーナは基本的に殆どの生物を暗記している。最強の魔獣である竜族から始まり、果ては判別などつかなさそうな虫まで、文献や実物を見ることができれば覚えている。

ちなみに「箸」はとある知人に教えてもらったものだ。ルーナは単純ながらも合理的なそれに好感を持っている。何とも奇妙な魔女である。

「まあ、美味しければ問題なし！ 別に毒はなさそうだし」

そして、かなり適当な魔女である。

ルーナの見えた目は十五歳ほどで、背は百六十あるかないか、と実は平均的かもしれない。ルーナが小さい小さいと言われるわけは、周りの人間の所為なのだ。

ノクスは人型の際、百八十を超えている。ノワルーナは百七十ほど。その他も性格が災いして知人は大人、しかも男ばかりだ。並んでいれば実際より小さく見られるのも当然である。

しかし無情にも、ルーナにちびや餓鬼と言えば、ほぼ確実に殺される運命にある。

かなりの量の食事を平らげ、満足そうにルーナは唇を舐める。あの量はいったいどこに消えたのか。

にこにこ笑っているルーナを、ノワルーナは呆れるような表情で見ている。

「やっぱり欲求は満たすべきものだね」

前に人は欲望と戦うべきものだと言っていなかったか？

ノワルーナは言葉を呑み込む。その判断はルーナに対しては最も正しいものだ。言えば何かしら災難が訪れるであろう。

青年が年下の少女に扱き使われ、顔に似合わず食器を洗う光景は、かなり奇妙だ。

「五百年かぁ。長いね。皆死んだかなあ？ あははは」

「……軽すぎんだろ」

けたけたと内容と噛み合わない笑い方のルーナに、的確な突っ込みを入れる。実際ルーナはそのことについては悲観していないことくらいはわかる。

いや、とノワルーナはルーナの言葉を否定する。

「いるぞ、一人。人間で生きてる奴」

「はい？ 精霊とか魔族ならともかく、五百年も生きてる人間なんているわけ……」

「お前の弟」

「……………」

さあ、とルーナは顔を青ざめた。絶句している。

ルーナには親はいないが双子の弟はいた。魔力量や知識ではルーナに敵わなかったが、それでも充分人間離れた天才だった。ただルーナとは違い、魔法ではなく呪術に精通していただけで。

【白水の呪術師】と、その名を聞いて怯えぬ者など、いなかった。ルーナの通り名である【月影の魔女】は、どちらかといえば知る人ぞ知る名だ。魔法と知識の天才という印象を受けられる。しかし弟——二人が双子だと知る者は少なかったが——の通り名【白水の呪術師】とは、言うなれば魔王と等しい脅し文句だ。

曰く、無情な白い悪魔。

「……………あの子、遂に禁術に手を出したのか、そうか……………あははは……………」

口は笑っていたが、目は笑っていなかった。確実に怒っている。元々弟はルーナに対して狂っていたが、そこまですると思えばずもなかった。止められるだろうから自分を犠牲にして世界を救うなど伝えなかったのだが、そのことが仇になったらしい。

まったく、運命は常に無情だ。

「ノワが知ってるってことはここにも来たってことよね？」

「あ、ああ。お前が眠ってからすぐに」

「そっかあ。うんうん、そうか」

ルーナは本気で怒っている時ほど笑う。ノワルーナはそのことを知っていた。

口元を歪に上げて、ルーナは言う。

「——なら、責任持って私が殺してあげないと」

小さな呟きだった。だがそれを聞いたノワルーナには冷や汗が伝う。

その言葉には何もなかった。怒りも哀しみも責任も決意も、何も。

「ま、取りあえず人様に迷惑かけてたら平手打ちかな？　どう思う、姉のビンタ」

「……相当、こたえるだろうな」

「だよね。あんのシスコン、一発いってやるぜー！」

いえーい、と軽い調子で言うルーナには先ほどの面影はなかった。ノワルーナはやっぱり変わっていないと、懐かしさと恐怖を混じらせて思う。

それこそが、【月影の魔女】なのだから。

「やっぱり私の魔力はガタ落ちなんだねえ。あの子が気付かないな

んて」

「ああ、真っ先に飛んできそうなのにな」

「本当だよ、まったく」

はあ、と溜め息を吐くルーナは、ただの少女であり、魔女だった。そして、ノワルーナの主である。

3 魔女の思考（後書き）

感想を頂いてしまいましたよ、あわあわ。

か、かなり動揺しております、ええ、はじめてなもので……

まだ四話なのに！ 一日しか経ってないのに！

こんな駄文を読んでくださりありがとうございます。

できる限り面白くしようと努力しますので、これからも宜しく願います。

作者の突発的な妄想の賜物ですので、これから先どう転んでいくかわかりませんが……

オリジナリティを出せるよう、出せたら（しつこい

あ。ちなみに明日からは全然更新できないと思いますので、その辺りはご了承くださいませ。活動報告の方は最低週一で顔を出せるようにいたします。

4 魔女の力量

「――『光よ』」

ルーナの手の上に光の球体が現れる。くると回るとそれは、すぐに消えた。

その様子を見て深く溜め息を吐き、そして空を見上げる。星がきらきらと瞬き、どこまでも広がる夜空。

「あー、もう！ 駄目だあつ！！」

そして大声を出した。

塔のすぐ傍にルーナはいた。自身の魔力を確かめるためである。だがルーナの予想以上に魔力は減っていたらしく、五百年前のような魔法はおろかノワルーナよりも下手くそになっていた。

ちなみにノワルーナは魔法が苦手だ。力技の方が得意である。

「『我が望みしは常闇を照らす光。我が力を汝が糧としここに顕現せよ』」

ほう、とまたもやルーナの手の上に光の球体が現れる。ただそれは先ほどとは違って消えなかった。しかしそれを見るルーナは更に大きな溜め息を吐く。

ルーナが手で光を払えば、光はすぐに掻き消えた。

「ありえない。この私が、【月影の魔女】ともあろう者が高が灯を生み出すのに単語呪文じゃ駄目だなんて……っ！ 指示呪文を、高が、高が灯ごときでえっ！！」

ルーナは自身に腹が立っていた。何故かといえば、もちろん自身の魔力についてだ。

魔法とは本来自身の魔力を想像と組み合わせる具現化するものである。世界の理を歪めるため、大きな事象を起こそうとすればするほど魔力が必要になってくるし、想像が曖昧な場合も世界の理に組み込むために魔力が必要になってくる。逆に想像がはっきりしている場合は多少魔力の消費が少なくなったりもする。

呪文は想像を鮮明にするものだ。言霊の力によって、言葉にし世界に馴染ませることによって具現化をよりしやすくするのだ。もちろん、自分の中のイメージを強める働きもある。

つまり、無詠唱が最も高度で、呪文が長ければ長いほどそれは魔力が少ないということだ。想像力が低い場合もあるが、魔力によって左右される割合の方が大きい。

「うう。まさかここまで魔力がなくなってるなんて……」

ルーナはかなりショックを受けていた。稀代の魔女と呼ばれた自分が、普通の魔法使いほどに成り下がっていたのだから。

だが、元々魔法使いなどその程度のものだ。ルーナが異常すぎることをすっかり忘れてしまっている。

「《灯火》」

次にルーナが紡いだ言葉は、先ほどとはまったく違っていった。

失われたはずの古代語。言語そのものが呪文となっている、古の魔術。

古代語とは文字そのものに意味があり、それこそ言霊の力のみで現象を引き起こせるものだ。呪術とはそういったもののことを言う。そのために魔力量が少なくとも単語呪文で顕現できるかと試したのだが。

「うーん、やっぱりこっちの方がいいか」

ゆらゆらとルーナの手の上で火が揺れる。先ほどの白い光とは違い、それは赤い火だった。

古代言語はそのものに意味があるため、想像とは多少異なったものが生まれる場合がある。現在の魔法ならばたとえ同じように灯火と唱えようと、術者が白い光をイメージしていれば白い光が生まれるのだ。

ちなみに、現在使われるものを【魔法】、古代語を使用したものを【魔術】という場合が多い。

「取りあえずはこっちで代用だねえ。ノクスに習っておいてよかった」

ふあ、と欠伸をし、塔に戻ろうと足を動かす。
が、

「――？」

不意に何か、違和感を覚えた。振り返ってみると、森の奥に何やら炎の赤が見える。

よく見ればそれは松明で、誰か人が通っているようだった。こんな森の奥に人が来るなど珍しい。

危険かどうかかわからないので、近寄らずに塔に戻ろうとする。好奇心旺盛なルーナだが、自分の身の程を弁えることぐらいはできた。今の自分は昔よりも弱いのだ。

「つてことで帰ろう。何か嫌な予感がする」

振り返ったのだが、背中に視線を感じた。恐らくは気付かれたか。ルーナは別に気付かれること自体はいいので無視する。

危なくなったらノワルーナに助けを請えればいい。あの人形は普通ではないのだ。たとえ魔法使いを相手にしてもよほど何かなければ勝てるであろう。

しかし、ルーナは基本的に人付き合いなるものが苦手だ。なので即行で塔の中に逃げ込んだ。

塔の中ではノワルーナが昼の残りの魚介類を焼いていた。といっても魔法で皿の上から炙っているだけだ。

ちなみに昼食以降の今までの時間は呪術の解明で消費した。起きて早々時間の使い方が間違っているとノワルーナは心の中で思う。

「ん？ どうした？」

「別に。ただやっぱ私は人間嫌い」

「何を突然……」

そう言いつつも完璧に無視していた。ルーナが変なのは最初からだ。とノワルーナは思っている。実際は違うのだが、それを知っているのはルーナの弟だけだ。知るはずもない。

腹が減ったと言わんばかりに椅子に座って食事を待つ姿は、小動物にしか見えない。

しかし、そんなルーナを邪魔するように扉を叩く音がした。

「ああ？ 誰だよ」

「しっらっないっ」

無視を決め込むことにしたらしいルーナは、ノワルーナの問いかけに目線を合わせるだけだった。まあ、その目線はお前が行けと言っていたが。

主に逆らうこともできないノワルーナは渋々扉に向かう。

「誰だよ、まったくこんな夜中に」

がちやり、と扉は音を立てて開く。そこにいたのは、少女だった。黒いフードを被っているためわかりにくいだが、少女が焦っていることだけはわかる。

「す、すみません！ あの、助けてください！」

「……具体的には何をどう？」

ルーナがそちらを見ることすらせずに言葉だけを掛ける。少女は驚いたように一瞬かたまり、しかしはつきりと話す。

「ち、近くで魔獣に襲われてしまって、ラウ——、いえ、同行者が大怪我を！」

「ふうん。じゃ、ノワ後よろしく」

「は？ 何で俺が——」

振り返って異を唱えようとするが、ルーナを見て固まった。ふふふ、と悪戯好きな子供のように笑っている。

ルーナが笑っているときは、碌なことがない。

「黙って働け、この無能人形」

「はい、わかりました」

はっ、と気付いた時には口が肯定を示していた。体は本能に正直である。無意識の内に自己防衛をしていた。それもこれも、全ては五百年前の「お仕置き」の所為だ。

ノワルーナは見た通り、不良少年的思考回路の持ち主である。それこそルーナの手によって生み出された当時は作り手であるルーナの命令すら聞かなかった。最初は魔法人形が作り手に似ることは知っていたため、自分も命令を嫌うルーナは放置していたのだが、ノワルーナは気付かぬ内にルーナの地雷を踏んでしまい——後はご想像にお任せする。

ちなみにその場にいたノクス曰く、「人の悩みに口を出すべきではない」だそう。

そんなこんなで一応責任感はあるノワルーナは、やはりルーナの下僕として働かざるを得ないのであった。

5 魔女の助力

「こちらですっ！」

慌てる少女だが、同じほどの速度でついていくノワルーナも、そのかなり後ろを歩くルーナもまったく急ぐ様子はない。更にいうなら、ノワルーナは義務感だけである。

ルーナもノワルーナも、面倒ごとは嫌いだ。天使とは程遠い存在であつた。

少女の案内はやがて、川へと辿り着いた。細い小川は清く澄んでいる。そこに、人影が見えた。まあ、ルーナはかなり後ろにいるため、実際に見たのはノワルーナだけだが。

人影は男性だった。髪が長いので女性にも見える中性的な面立ちで、深い海の藍色をしている。川の傍に横たわるその顔は苦しそうに歪められている。

それもそうだ。彼の腹部には赤く染まった包帯が巻かれていたのだから。

「魔法を施しても効かなくて……っ！ 私は、どうしたら」
「邪魔だ」

錯乱状態に陥っている少女に言い、そのまま包帯を解く。何かに噛み付かれ挟まれたような、どす黒い赤が溢れる傷口。ノワルーナ

はそれを一切表情を変えずに一瞥し、くるりと振り返った。

「おい、ルーナ。俺は解呪はできないぞ？」

「へたれ〜。今まで何してきたんだ〜」

「何って、何も。お前が目覚めるのを待ってたただけだ」

「ちよつとぐらい腕あげようよ、そこは」

よいしょ、と木々の合間からルーナが顔を出す。やれやれといった表情をしているが、傷を見て溜め息を吐く。

「これぐらい一人でどうにかしてよ〜。面倒臭い」

「だからなあ、俺は古代魔術は使えねえって」

「……《破魔》、ついでに《再生》」

傷口に手を翳す。すると、溢れていた血が嵩を減らし、それと同じに男性が顔を顰める。

再生には熱と痛みを伴うのだ。今頃炎に焼かれるような熱い激痛が彼の身を襲っていることだろう。

魔法で治せない傷は大体が「治せないようになっていく」ものだ。そこには魔法であつたり魔術であつたり、何かがある。ルーナはそれを解除したのだった。しかし、本来ならばできないものである。古代魔術であるからこそできる芸当だ。

ルーナは大きく欠伸をし、まったく気にしない様子である。

「時間があんまり経ってないから、綺麗に治るだろうけど。見た目は綺麗でも中身はまだ焼け、じゃなかった。完治してないからね」

ルーナは焼け爛れ、と言おうとして辛うじて言葉を呑み込んだ。心配そうにしている少女に言うべきでないと途中で気付いたのだった。気付くのが遅い気がするが。少女は気付かなかったようで、泣

き出してしまっていた。

ぎよっとしたノワルーナと、眠そうに欠伸を連発するルーナ。

「あう……っ！ よかったあ、らうるすさまあ~~~~！！」

「……人間の女って面倒臭いんだな……」

「こらこら。だから完治してないってば。抱きついちゃ駄目だつて」

完璧に破顔した少女に、ノワルーナは呆れたような目線を向け、ルーナは抱きつこうとした少女に制止を掛ける。

少女はルーナよりも背が高かったのだが、中身はルーナよりも幼いらしい。

「絶対安静！ 弟はともかく私は呪術苦手なんだよう」

「は、はい。すみません……」

ぐずぐずと泣いている少女をルーナが諭す。ノワルーナは内心どっちが子供かわからない、と呟いていた。

ルーナは言葉とは裏腹に乱暴に包帯を取る。ノワルーナは呆れたように見ていた。血を含みすぎて本来の役目を失ってしまったそれを、ルーナは投げ捨てる。

「魔獣に挟られたのかな？ まったく、面倒臭いことするね。前はこんなことしなかったのに。五百年は長かったかなあ……。あ、ノワ運んでね」

「やっぱり俺かよ……」

薄々予想はしていたようで、ノワルーナは文句を言いながらも男性を背負う。こちらはかなり適当だ。二人の性格が基本的には雑なことがよくわかる。

「ほら、後は寝てれば治るから。私の塔に療養中はいてもいいよ」

「はう……、ありがとうございます……！」

「……いい加減泣き止もうよ」

目を赤く腫らして泣く少女に、呆れたようにルーナが言う。ノワルーナがさっさと戻っていつているので、ルーナははぐれないようにさり気なく少女の手を引く。

目を擦りながら歩いている少女が危なっかしくてルーナはハラハラしていた。木々の根が複雑に絡み合っているため、かなり危険なのだが。

「足元ちゃんと見て。はぐれても知らないよ」

「うう、すみません」

段々泣き止んできた少女を見て、ルーナは手を引くのを止めた。

面倒臭いらしい。普通ならばそれくらいしてやれ、と思うところだが、ノワルーナはまったく違った。

何故今日はこんなにも機嫌がいいのだろう、と。

普段のルーナならば絶対に助けたりはしない。基本的に気まぐれに行動を起こすルーナだ。例をあげるのならばノワルーナを作った理由を聞いた時に言った一言が、面白そうだから、である。面白そうだからという理由でここまで高性能なものを作るのか、とノワルーナは呆れた。

だから、今回この二人を助け、自分の邪魔をされることを極端に嫌うルーナが塔にまで連れて行くと言ったときにはかなり驚いた。

「……また、何か企んでるんじゃないかな……？」

人助けと称してむかついた人間の財産を搾り取り、民にばら撒くような人物だ。もちろん、目的はばら撒くことではなく搾り取ることにある。

今回も何か思うところがあるのだろうか、とかなり心配するノワルーナであった。

6 魔女の微笑

「……平和だねー」

まったくの棒読みでルーナは言った。目線の先には少女が寝ている。泣き疲れていたのか深く眠っていた。

寝ているベッドは、もちろんノワルーナのものである。

傷を負っていた青年は来客用にとかなり前に拾ってきた——実際は知人に貰った——地下にあるものに寝かせた。五百年前にルーナが作った空調などの設備は壊れていなかったため、ノワルーナに魔力だけ使わせて動かした。

ルーナには自分のベッドを使わせるという発想もなければ、自分の魔力を使うという選択肢もない。基本的にノワルーナに全てやらせる。

「つまらなさそうに言うなよ。平和な方がいいだろ」

正論をノワルーナは言う。だがルーナは大きく溜め息を吐いた。そもそも、人助けをしたルーナが気持ち悪くてしかたがない。ルーナが人助けをすることなど皆無だ。裏に打算か悪意が潜んでいそうに恐ろしい。

「なあ、ルーナ。何で連れてきたんだよ」

「う？ んー……」

少しぼうつ、とした顔で考えるような仕草をとり、そして笑った。
……悪い顔にしか見えない。

「ノワはわからないんだ？ 駄目だな、性能が悪いのかな」
「……」

「あは？ 冗談だつてば。怖い顔しない」

絶対に本音だった。

ノワルーナとしては諦めているので、まったくとはいえないが気にしていない。昔からもっと酷いことを言われてきたのだから、慣れたものである。

ルーナは長い黒髪を弄りながら言う。

「あの人、ああ、男の方ね？ あれノクスの関係者だよ。闇の香りがするもん。ついでに言えば女の子は純血の人間じゃないねえ」

世間話をするようにルーナは言うが、普通そんなことはわからない。
い。

闇の香りとは魔力が関与しているのだろう。ノワルーナは魔法類には疎いのであまりわからないが、人の魔力にはそれぞれ個性があるらしく、ルーナは直感的にそれがわかるらしい。

「きっと闇の方の神殿の関係者でしょ？ ノクスは神殿で寝てるんだろ？ 連れて行ってもらえば文句ないし。五百年だもん、何が変わってるかわかんないでしょ？」

「あっそう……」

やっぱり打算だった、とノワルーナは一人納得する。
その時不意にルーナが笑った。

「お目覚めかな？ ほら、ノワ連れてきてよ」

ああ、またパシリ。

「——目え覚めたか？」
「っ！？」

不意に後ろから掛けられた声に、男は跳ね起きた。
よくわからないが傷は完治しており、まだ痛むものの目に見える
範囲では治まっている。視線の先には銀色の髪的青年。

「動かねえ方がいいぜ？ あと俺はお前の連れに頼まれてるだけだ
から、何にもしねえよ」
「……彼女は？」

ノワルーナの言葉に男は様子を窺っているかのように問う。
苦笑しながらもノワルーナは答えた。

「上で寝てるな。ああ、そうそう。初対面の人間をあんまり信用し
ない方がいいって教えとけよ？ こっちが眠くなるぐらいの爆睡だ

ぜ？」

「……あの子は……」

まったく、と呆れたように呟く。ノワルーナはなんだか親近感を感じてしまい、そして虚しくなった。

苦勞人の性である。

「来いよ。暗いから足元氣をつけろ」

「……」

まだあまり信用されていないようだが、指示には従ってくれているのでいい。

どちらにしろルーナの命令なのだから、従わなかった場合引きずっていくだけなのだが。

「おはよー。神官さんだね？ はじめまして」

「……………」

「ちなみにお前の怪我を治したのはそのルーナだ」

目を見開いて驚いている。

まあ、当たり前のことだろう。銀髪緋眼の不良的ノワルーナと、

黒髪黒眼の少女ルーナである。ちぐはぐな感じは否めない。

珍しい色彩だけでも驚くだろうに、あの大怪我を治したのは少女、しかもノワルーナを扱き使っているのもその小さな少女である。

明るいい階では男の顔もはつきりと見え、藍色の髪と瞳が鮮やかなものであることがわかる。

「……助けていただいたそうで、ありがとうございます」

「いやあ？ 別に堅苦しいことはないよ」

ひらひらと片手を仰ぐ。

にい、と悪戯そうに笑って。

「そう、それはいいんだけどね？ ——その手に持つてるもの、離してもらえる？」

「っ！？」

後ずさるうとした男の左手を、ノワルーナが無言で捻り上げる。からん、と刃が滑り落ちた。

「うん、殺そうとしてなかったのだけは褒めてあげる。何かわけありみたいだねえ？」

「……お前命拾いしたな。いつものルーナだったら、いや、あいつがいたら死んでるぞ？」

あいつとは、ノクスかルーナの弟である。二人ともルーナ至上主義のためこんなことがばれたら、確実に殺されている。

まったく、ルーナの周りには危険人物ばかりいる。

「ほらほら、ノワも手を離してあげて。座りなよ、何もしないし聞かないからさ?」

ふふっ、いつものように笑うルーナだった。

白（前書き）

残酷描写あり？ ホラー風味？

これ、グロイですか？

思った方は言って下さい。タグ付けます。

……グロイのかなあ。

読まなくても平気です。

白

少年がいた。

服と髪は白で、まるで他と混じることを許さないような、それほどまでの純白。瞳は灰色で、彩色がない、どこか絵のように幻想的な少年だった。

漆黒の闇の中では異質すぎるその少年は、少し幼さの残る顔に鋭い氷のような拒絶を孕んだ表情を浮かべる。

「……つまらないなあ」

少年の言葉は闇に溶け、言葉を返す者は誰もいない。何も見えず聞こえない隔離された孤独の闇の中で、何故か少年はくすくすと楽しそうに笑う。

目はまったく、笑っていない。

歪に弧を描く口は、どこか狂気を孕んでさえた。

「ああ、つまらない。こんな世界に意味なんてない」

誰も聞いていないことを知りながら、少年は道化のように言う。

不意に少年は足元を見る。まるでそこに何かがいるように。

「……どうしたの？ 終わった？」

ぴちゃ。

水溜りを踏んだような音と共に、ゆらりと影が揺らめいた。

少年の視線の先にいるのは、黒い犬。犬にしては大きく、少年の腰ほどまでだった。

愛でるには凶悪すぎるその黒犬を、少年は恐れる様子なく撫でる。

「そう。なら帰ろうか。彼らもわかったはずだしねえ……」

その少年の一言と共に、空気が変わった。

いつの間にか月の光が窓から差し込み、しかし明かりがないために暗い、部屋の一室にいた。少年は無言で部屋を出る。

ぴちゃ、ぴちゃ。

ふーっ、ふーっ。

水を踏む音と、犬の息遣いだけが木霊する。

月明かりが少ないためにわからないが、廊下がずっと続いている。少年は迷うことなく歩いていく。室内にも関わらず、水を踏む音が途切れることはなかった。

まるで、床一面に水が撒かれているように。

——……たす……て……

少年と黒犬以外の気配がなかった中、どこから掠れた音のような声が聞こえ、少年は足を止めた。犬も同じく足を止める。

声が聞こえてきたであろう部屋に続く扉を開け、入る。

薄暗く見えないながらも、床に倒れていた影は女性だった。

荒く浅い息と、恐怖に彩られた瞳を、少年は見る。

「あ、貴方……生きてる……！ ……たすけ、て……！」

ほっ、と安心したように息絶え絶えに言うその「人」を、少年は笑ったままで見ていた。助けようともしない。

女は何か様子がおかしいことに気付いたのか、瞳に恐れを含ませる。少年の眼は冷たかった。

「……駄目じゃないか、カニス。まだ生き残りがいるよ？」

相変わらず笑ったままで、少年は黒犬に向かって言う。女は犬の存在に気付いていないのか、それとも少年の狂気に気付いたのか、恐怖に見開いた目を少年に向けるだけだった。

「——お食べ」

少年の一言に、黒犬は前に出る。そのことでようやく犬の存在に気付いた女は、得体の知れない少年に向けていた漠然とした恐怖ではなく、はっきりと化け物に対する恐怖を持った。

「いつ、犬っ！？ い、いや……！」

「まあ、自分の雇い主を恨むんだね。この僕を殺そうと考えた、馬鹿なアレをさ」

けたけたと声を上げて少年は笑う。

犬は主人の言いつけ通り大きく口を開き、女の顔を覆い——

「ひっ——」

「疲れたねえ、カニス。これからは最初から全部残らず食べてよ？」

淡い月の光の下で、少年は大きく欠伸をしながらそう言った。苦笑気味に言われてしまった黒犬は、しょぼん、と尾と耳を垂れる。くるり、と少年が振り返れば、そこには屋敷があった。ここら一帯の領主が「住んでいた」屋敷。賄賂や横領など、民には好かれていなかったようだ。

「本当、僕を殺そうだなんて傲慢にもほどがあるよね。あーあ、手を出さなければもう少し長生きできたと思うんだけどなあ」

くすくす、と少年は笑う。

今では、屋敷の中は死体だらけだ。生きているものは一人もいないだろう。

全員残らず、犬が喰らってしまったのだから。

明日には面白い騒ぎになっているだろうと、想像して少年は笑う。

「……つまらないなあ。姉さんのいないこんな世界は、とってもつまらない……」

血濡れの足跡を残しながら、道化のように少年は手を大きく広げて、月に向かって言う。

「——ずっと待ってるんだよ？ だから早く目を覚まして、僕の愛しい姉さん」

狂気を孕んだ言葉を、呟いた。

人狼（前書き）

別に読まなくてもいい番外編その二。

人狼

「——それで、言い訳はもういいか？」

仁王立ちで腰に手を当てるその青年は、かなり怒っているようだった。

銀髪は適当に切ったであろうことがはっきりわかるバラバラな髪の毛の長さで、服もあったものをそのまま着ただけのように合っていない。だが元々顔の造りがいいのか、切れ長の藍色の瞳も似合って不細工には見えない。

「……うう、だって闇の臭いがしたんだよ……」

青年のぴりぴりとした視線を受ける怒りの原因は、地面に正座で座らされている少年だった。青年と同じ銀色の髪と、青年のものよりも少し薄い青色の瞳を持つその少年は、おそらくは青年の弟なのだろう。図が兄に怒られる弟そのままだった。

「だからっていきなり人間に噛み付くか？ ああ？」

「うっ……。すいませんでした……」

しゅん、と耳と尾がうなだれる。

そう、獣の、それが。

青年にはないが、少年にはまるで犬、いや、狼のような銀の耳と尾があった。

まあ、それもその筈。二人は人間ではないのだから。

「あのなあ、俺らは人間よりも強い。だが数では圧倒的に不利なんだぞ？ 本気で襲われたらどうするんだ」

「だからこめんつてば……」

もう反論することもできないようすの少年が、半泣き状態で呟くように言う。兄に勝てるはずもないのだから、諦めていた。

そんな弟を見て、兄である青年は目を細めた。

「本気でこの【狭間の森】に入ってこられたら、俺にも【王】を護りきる自信はない」

「っ！」

「そういうことだぞ、お前のしていることは。【王】はまだ弱いんだ。それはお前の方がわかってるだろ？」

「……っ」

今まで反論しなかった少年が、反論できなくなった。本当の後悔と反省を瞳に見て、青年は言つのを止める。

もう十分に反省しただろう。

「……ま、俺だけじゃねえし、【王】を傷つけられる人間なんていねえよ。鴉^{からす}も蜘蛛もいるんだしさ」

「うげっ。あいつらオレ嫌いだ……」

「ああ、蜘蛛は俺も無理だ」

あからさまに嫌そうな顔をした弟に、兄も賛同する。仲間というのも憚られるような人物なのだから。その上何を考えているかわからない。

「鴉はただ単に口下手なだけだぜ？」

「え……、この前というか会ったびに殺すって言うてくるんだけど」
「……」

流石にフオローのしやうがなかった。

悪い奴ではないんだけどな、と心の内で呟いておく。

「ああ、そういえば【王】がお前のこと探してたぞ？」

「はあっ！？　ちょ、兄ちゃんそういうことは早く言うてよ！」

「わりい」

「また泣かれるっ！！」

ああ、だから蜘蛛に嫌がらせをされて鴉に嫌われているのか、と
必死で走っていく弟を見ながら青年は思う。

「二人とも【王】至上主義だからなあ。鴉は無意識か」

苦笑いを浮かべる。友人というには少々語弊があるが、それでも
かなり昔からの知り合いである二人は、どちらも厄介だ。

一人は好きだからこそ傷つけようとするし、一人は好意そのものを
否定している。

「あー、俺って苦労人」

一人、ぼつりと呟いた。

人狼（後書き）

2017.2.6 一部修正。

1 人形の災難

「——へえ、やっぱり闇の神殿の神官さんかあ」
「ええ。ラウルスと申します」

ルーナの向かいに男、ラウルスが座り、その隣にノワルーナがいる。奥の部屋には少女が眠っていた。

ルーナはまったく変わらずにこにこと笑い、ラウルスは一応の微笑を浮かべる。ノワルーナといえば興味がないうで先ほどラウルスが落とした小刀を触って遊んでいた。

ばきつ、と素手で小刀を折ったノワルーナも、二人の会話は聞いている。

二人とも、とんだ狸だ。

「私はルーナ。一応魔女だよ。そっちがノワルーナ」

「失礼ですが……彼、人間ですか？」

「ううん。人ではない、とだけ言っておこうかなあ？」

にしし、と悪戯をする子供のように笑うルーナ。

一方、そうですか、とそれ以上聞かずに微笑むラウルス。人間って恐ろしい、とノワルーナは心の中で呟いておく。見た目こそ平穩そうな二人だが、空気はかなり淀んでいた。

居心地が悪すぎる。

「それで、本題に入ってもらえますか？」

笑っていた目を細め、無表情に言う。ルーナは笑ったままだ。

ノワルーナは冷や汗ものだが。

ルーナは気に入った人間であれば多少自分の邪魔をしたとしても許す。だが嫌いなものにはとことん容赦ない。

そして、ルーナの人間の好みはわかりづらいのだ。それに怒っているときも笑っていることが多いので判断できない。

「いやあ、話しが早くて助かるねえ？ 私は闇の神殿に用があるんだ。連れて行ってよ」

「お断りします」

ばつさり、一瞬の迷いもなく言い切った。ノワルーナは停止する。ルーナが怖くて仕方がない。

当のルーナといえば笑ったまま値踏みするような視線を向けるだけで、そしてノワルーナをちらりと見やる。

びくつ、とつい反応してしまうノワルーナも気にする様子はない。

「なら勝手に行くだけだけど」

「いけません。あそこにあるものが何か、貴女は理解していない」

「……絶対君より理解してる自信があるんだけどなあ」

溜め息を吐きながらルーナは言う。まあ、確かにそうだ。ノクスのことを一番理解していたのはルーナなのだから。

「何も知らないくせに。危険だと決め付けて恐れているのは貴方たちの方なのに」

また、だ。

冷えた声。何もない眼。

「まあ誰にどう思われようがいいけどねえ。ただ邪魔は許さないよ？」

にい、と嗤^{わら}う。

「ノクスがまた独りになるのは、約束破りになってしまうもの」

少しだけ憂いを帯びた眼で言う。

ノワルーナはルーナとノクスの出逢いは知らない。創られた時にはもう当たり前のようにルーナの隣にはノクスがいた。

行動的なルーナに付き従うように、闇は常に傍らに。

あれは、誰にも侵すことなどできない関係。

「……ノクス、とは……？」

「内緒」。見たらわかるんじゃない？」

「いや、わからないだろ」

五百年前から眠ったままならば、闇に人格があるなど知らないだろう。

……本当にルーナ以外に興味などないらしい。ルーナが眠っているのに起きるはずもなかった。

「起こしにいかないと起きないよねえ、気づいてないみたいだし」「行くのかよ」

「止める権利は彼にはないと思うんだ」。それに神官なんだからさあ、ノクスを手伝うのは普通じゃない？」

「監視する方だろうが。危険じゃねえか」

闇そのものであるノクスは、危険だ。その力には方向性があるのだから。

どちらに転ぶかわからない、不安定な力。

「危険なんて言ってる時点で駄目だよ。それに本当に危険なのが誰か、わかってない」

ラウルスを放置して進む二人の会話。う、と言葉をなくすノワルーナの心情など誰もわかるわけがなかった。

「ああ……、そうだな。危険人物はまだいたな」

「まあ、そういうこと。ってわけだから勝手に行くよ」

「……そこで話をふられてもわかりません」

至極まともなラウルスだったが、二人にそんなことが通用するはずもなかった。基本的に自己中心的で他人を無視する二人だ。しかも確信犯の場合が多い。

「連れて行ってくれないならそれでよし。二人で勝手に行くだけのこと」

「【世界の闇】は危険です。五百年前【世界の光】が起こした災厄を知らないのですか？ あれで闇も危険視されているでしょう」

「……それをルーナに言うか……」

呆れた様子でノワルーナが言う。ルーナは呆れを通り越して苦笑いだ。本人は真剣に言っているのだが、状況的に笑いにしかならない。

その災厄を治めた本人に向かって、知らないか、など。

「——ラウルス、さま……？」

場違いなとぼけたような声が後ろからし、振り返る。

案の定いたのは少女で、どうやら寝起きで寝ぼけているらしかった。

「アケル、何をしているのです。他人の家で」

「へっ、あ、すみませんっ!!」

冷やかな声を掛けるラウルスに、ようやくはつきりと目を覚ましたらしい少女は慌てて近寄ろうとする。

が、ずるっ、と足を踏み外して前のめりに倒れた。

「きゃあんっ!」

「っておい待てっ、うわあっ!」

結果、ノワルーナにダイブ。がたーん、と椅子と共に床に倒れ込み、上には少女が乗っている。

ルーナはニヤニヤと笑い、ラウルスは頭を抱えている。ノワルーナは何故自分ばかり、と溜め息を吐き、当の本人である少女は目を回していた。

2 人形の苦悩（前書き）

説明文は流し読みでいいです。おそらく。

2 人形の苦悩

「——いやあ、災難だね、ノワ」
「面白がるな」

にやにやとしているルーナに、イラついているようすのノワルーナ。アケルという名のラウルの従者らしい少女は、ただただ恥ずかしそうに赤面して俯いているだけだった。ラウルは無視している。

「それでさあ、思ったんだけど、助けた恩は無視？」
「……それとこれとは別です」
「じゃあ一つ聞こうか。神官さんが何でこんな辺境の森の中にいるのかなあ？」

口を閉ざすラウルスに反し、アケルはようやく顔を上げた。ノワルーナとは目を合わせないようにしているらしく、顔はおかしな方向を向いている。

「それはラウルス様が素晴らしい神官だからですっ！ 皇子が——」
「アケル、止めなさい」

「……ラウルス様、助けて頂いたんですよ？ 神殿に入る許可からい出してあげたらいいじゃないですかあ……」

未だ黒いフードを被ったままのアケルだったが、ふて腐れた表情をしているのであることは推測できる。

対するラウルスはもう取り繕うこともせずに眉を顰める。

「ひつどいなあゝ。あのままだったら死んでたのになあゝ」

「……関係ありません」

「悲しいものだねゝ。昔の神官は変人ではあったけれど礼儀は弁えてただけだな」

わざとらしく言う。実際は五百年も前の話なのだが、どうやらラウルスには気に食わなかったらしい。前々から禁句だったのか、アケルがぎよっとしてラウルスを見ている。

「……私が、神官に相応しくない、と……？」

「いゝやゝ？ 神官としては立派だと純粹に思うよ？ ただねえ、

「闇の神官」には向いていないってこと」

アケルはあからさまに不機嫌なラウルスがいつきれるかとびくびくしており、ノワルーナもルーナの身勝手さがいつおかしな方向に向かうのか気が気ではない。

常に被害を被るのは周りの人間である。

「君はきっとノクスを理解できない。ノクスを理解できない人間が闇の神官になんてなるもんじゃないんだよ？ 現に君は「闇の名」を識らないじゃないか」

「っ！？ それを何故……！」

「闇の神官っていうのはね、声を聞けるものになるものだよ。声はおろか存在の認識もできないような君が神官だなんて」

アケルとノワルーナにはラウルスが何故いきなり焦るように絶句したのかはわからない。おそらく魔女であつたから知っているのだらうとノワルーナは勝手に決め付けたが。

この世界において神官とは本来闇と光の均衡を保つ者である。方向性を持たない力が悪しき方向に進まないようにする監視者であり、それを崩す者に容赦はしない。

その神官に求められるものはそれを判断をする公德心や魔法の素質であつたりするのだが、唯一異色なのが光と闇を感じられるか、ということであつた。

魔力は「世界に働きかける」力であり、自身の中にあるため感じ取れる者も多いが、光や闇といったものは違う。「世界そのもの」であるが故にそれを知覚することは大変難しいのだ。

「傲慢だと理解するべきだよ。世界に属するような大きな力を、制御できると思つていることをね。人は小さく弱い。それは自身が思つているよりもはるかに」

「……貴女は識つていると？ 闇を感じ取れるような人がどうしてこんな所に……？ いや、なぜ貴女は闇に名があることを知つている！」

「うんうん。それは貴方たちの汚点だよねえ。部外者に知られるなんて管理者として最悪。でも私だから仕方ないんだよ」

「……お前が言つと奇妙な説得力があるな」

「でしょ？ ノワはわかつてるよね」

実際は好奇心に負けて闇の神殿に乗り込んだルーナがそのままノクスに出逢つてしまい、何故かノクスがルーナに全て教えてしまったというただそれだけなのだが……。それを知る者は本人たち以外にいるはずもなく、本人たちが教えることもないであらう。

光は純粹な力だが闇はノクスが同化しているために、その力に働きかけるには声を届ける必要がある。闇が、ノクスが聞こえる声を。そうして語りかけるための名はいつもノクスが知るに相応しい者に教えている。ノクスとは人格を指す名であり、闇の名ではない。もちろんルーナはそれを知っている。ノクスが私情抜きで闇の力を理解していると判断したためであつた。

「っていうかね、そもそもノクスを知らない時点でおかしいんだよ。ノクスは面倒臭がりだけど自分のことは弁えてる。きっともう何年も名を知る者はいないね？」

「……」

「もはや声すら聞こえなくなつたか。ははっ、やっぱりこれが人間の末路だね。認識できないものをどうやって管理するのかまったくもって不思議だなあ、名ばかりの神官さん？」

「……っ」

ルーナは満足そうだ。まったくもって性格が歪んでいる。他人を徹底的に屈服させることが元々好きらしい。気に入った人間にはとてつもなく甘いのだが。

沈黙する部屋。

「名ばかりの神官なんかじゃありませんっ！　ラウルス様は立派な御方で！」

「やめなさい、アケル。貴女は話しの内容すら理解できていないでしょう」

「でも——」

「黙りなさい」

冷たく切り捨てるラウルスに、アケルは黙り込んだ。反論を一切許さない断言。

ノワルーナは面白くなさそうな表情だ。他人を庇うなんてことは嫌いらしい。

ラウルスは少し考え込み、そして嫌悪感を隠そうともせずにとてつもなく嫌そうな顔をした。

「いいでしょう。神官長として案内します。ただし条件として闇に関する貴女の知識を。機密のことは目を瞑ります」

「だよね。お互いその方が都合いいし？ 教えられそうな範囲なら教えてあげるよ」

笑うルーナと嫌そうな顔のラウルス。アケルはそれをほっとしたような、心配するような表情で見ている。

ノワルーナだけとはんだ茶番だと不機嫌そうに眉を顰めた。ルーナの実力があれば無理矢理に屈服させることも簡単だろうに。嫌な主を持ってしまったものである。

「———そういうことから、準備宜しくね」

「結局俺か！」

2 人形の苦悩（後書き）

ちよこちよこ活動報告に裏話もどきがあります。

3 人形の仕事

ルーナは、自室の寝台に座っていた。とりあえずラウルスの怪我のこともあるので、出発は翌日となったからだ。

傍にある窓から月を見上げる。ぽっかりと空に浮かぶ白い月。五百年前と何一つ変わらない、自身の名である月。

「ねえ、ノクス」

声が届かないことはわかっている。深い眠りについた闇の人格である彼に聞かせるつもりはない。

ただ、言葉にしたかっただけで。

「私の選択は正しかったよね……」

ルーナのことを天才と呼ぶ者は多い。だが、ただの少女として扱ったのはどれだけか。

ルーナは多くの者の特別であり、その真意を知る者などいなかった。ノクスが一番の理解者ではあるが、彼と出会った前のルーナの心

など誰も知らない。

ただ一人知っていたが、救おうとはしなかった。

「……もう二度と、間違ったりしない……」

嗚呼、過去の自分へ問おう。

何故お前は、その道を選んだのか。

——何故、道を間違ったのか。

「——おはよ、ノワ」

大きく欠伸をしながら目の前の銀髪に向かって言う。それはもちろぬノワルーナで、疲れきった表情でルーナを睨み付けた。

彼の手には、何かがある。

「見つけたぜ。つたく、夜中中探したんだからな。どうなってるんだよ、あの倉庫」

「だってこの私が魔道具になんて頼る日が来るとは思わなくて。面倒臭いから片付けなんてしてないもん」

ノワルーナの手からそれを奪い取る。

それは、漆黒の扇子だった。ルーナが広げたそれには、黒い下地に桃色や白の花が咲き乱れる、とても細かな細工が施されていた。

「ん、流石私の一番弟子の作！ 五百年経っても機能してるね」
「一番弟子って、アイツ以外弟子なんていないだろ。というか弟子ですらないか？」

「気にしない」

そもそも、この世界に純和風の扇子があること自体がおかしい。箸といいこの扇子といい、ルーナの知人が作ったのだが、それもその筈でその知人は異世界から来たという。

行く当てのない知人の面倒を見たのがルーナである。もちろん目当ては異世界特有の様々なものであったが。

ちなみに、この扇子に施されているのは夜桜である。

「私の魔力を封じた人工魔石。ノワの「心臓」と一緒だよ？」

魔石の定義とは、魔力の塊である。ノワルーナの心臓もこの扇子もまた、ルーナが有り余る底なしの魔力を注ぎ込んで作り出した人工魔石であった。

ノワルーナの心臓が活動元となりルーナが施したありとあらゆる魔術を動かしているのに対し、扇子は「自然を引き出す」というものである。

炎や風といった自然そのものを操る、そんな魔術を施した。扇子があまりにも美しかったために、どうせなら力もつけよう、とお遊びでルーナがやったことだ。あくまでも遊びであるところが恐ろしい。

そんな力をもつその扇子は風化も劣化もせず、五百年前の姿のま

まだった。

「……それと俺と一緒にするのかよ」

「あ。あの二人は？」

「従者を神官が叩き起こしてるんじゃないか？　もう起きてるだろうが」

「ん。じゃあ行こうか」

実はまだ下の階ではラウルスの地を這うような声が響き、アケルは目を閉じたままだった。

「——まったく、人の家に入り込んでおきながら、熟睡するのは」

「す、すみません……」

「あはつ。口から涎垂らして寝言言ってたしね」

「……だめですう、それは私が食べる特製デザート……」

「きゃー！　やめてくださいっ！！」

無表情で咎めるラウルスと、笑っておちよくるルーナ、そしてそれに便乗して寝言を再現するノワルーナ。ノワルーナは結構しつこいらしい。アケルは赤面して絶叫。

玄関先でノワルーナに向かってぎゃあぎゃああと騒ぐアケルを放って、ルーナはラウルスに言う。

「怪我は平気？　早めに言わないと治さないよ？」

「ご心配なく。二度と貴女の手を煩わせるつもりはありません」

「ふうん。二度と貴女に借りは作りたくありませんってことだね」
「解釈は」自由にとろぞ」

未だに不穏な空気であつた。二人の周りだけ空気が淀んでいる。
ルーナは笑いながらぱしん、と扇子を閉じなおした。風が一陣走り、ラウルスが目を細める。

「さ、行こうか。【世界の闇】が眠る、闇の神殿へと」

だからいい加減黙れ、と視線でルーナは騒ぐ二人に語つた。

4 人形の予感

「——おおー。流石に少し変わったね」

塔があつた森の出口、木々の隙間からわざとらしく大げさにルーナは言う。森は緩やかな山だったらしく、ルーナが立っている場所からも緩やかに坂が続く。視線の先は木のなくなった草原にあり、その向こうにはここからだと小さく見える町があつた。

「あの町を越えた所に神殿があります」

ラウルスは完全な棒読みで言う。しかし、ルーナはまったく聞いていなかった。

ノワルーナは何故か、複雑な表情をしている。

「ねえ、ノクスを起こしにいく前にいろんなことしよう!」

「勝手にしろよ……。ただ厄介ことはごめんだぜ?」

「え? それは無理じゃない? 私の周りはいつの間にか厄介ごとだらけだよ?」

「自覚あるのかよ」

えへへ、と笑うルーナ。確かに周りの人物自体が厄介ごとではある。

世界の闇に、悪名高き白氷の呪術師、異界からの迷い人……

ノワルーナはよくよく考えればかなり凄いな、と苦笑いをする。
自分自身もかなり特殊で奇妙な人形なのだが。

「なぐんか嫌な予感がするねえ」

「不吉なこと言うな。お前のカンは大体当たる」

「だね。で、悪い時ほど確率が高い、と」

にい、と笑う。

あまりにも不吉で、ノワルーナは溜め息を吐いた。

「やっぱりこの髪色は浮くか」

あれからかなり歩き、ようやく町に辿り着いた。それまでにラウルスとの口論があったりし、アケルとノワルーナが疲労したが、割愛する。

フード越しにもわかるほどアケルの心労が大きかったため、ラウルスがルーナに言われて渋々宿屋に連れて行った。そのため、町の探索にルーナはノワルーナを無理矢理連れて出ている。

まあ、探索がしたかったがためにラウルスを説得したのだが。

くれぐれも妙な行動は慎んでください、とラウルスに言われたルーナだが、ノワルーナは絶対に無理だろうと心の中で断言しておいた。

ルーナが歩けば厄介ごとにぶつかる。

「前々から聞きたかったんだが、お前は何で俺の髪まで目立つ色にしたんだ？」

「え？　綺麗な方がいいでしょ？」

「……。自分も目立っていいことなかったくせに、俺もやるのかよ」

町の人間がちらちらと二人を見ていた。ルーナはあまり気にしないようすで欠伸をしている。ノワルーナとしてはもう少し気にして欲しい。

素朴なレンガ造りの家や店が立ち並ぶ道を、二人だけが浮いた様子で歩いていく。その周りに町人が避けてできた妙な空間があった。

「だって、どれだけ人に似せたってノワは人じゃないんだもん。なら、せめて綺麗な方が得でしょ？」

「……。お前、本当に酷えな」

「本音を言い合える仲ってことで。まあ、もうノワは私の手を離れてるけどね」

ルーナもノワルーナも、一部の人間には化け物と言われてきた。

ルーナはその魔力量と魔法の天才的技術を、ノワルーナは人にあらざる力を。もちろんノワルーナは人ではないために人以上の力を持っている。

そして、虐げられたことも、もちろん。

ルーナはどうでもよさそうに笑ったままだったが、ノワルーナは少し思い出したのか苦い顔をした。

「……。そういえば、お前の弟は何をしてるんだろうな」

「ん？　何でいきなり？」

「いや、前にルーナを罵った奴はアイツに殺されたことを思い出した」

ああ、あれね、とルーナは苦笑する。過激で姉好きな弟は、ルーナが侮辱されれば切れるのだ。あれはもう極度のシスコンだったが。

ルーナが望んでいないにも関わらず、目を離せば血祭りが始まる。だから、五百年前には何も言わなかったのだ。何をしてでも止められることはわかりきっていたから。そう、たとえ——何をしてでも。

「あゝ、どうせまた殺しまくってるんでしょうねえ。ノクスよりあつち優先にすればよかったかなあ、気づいてないみたいだし」

「止めれるのがお前だけだからな。五百年前に塔に来たときは本気で殺されるかと思ったぞ」

「ああ、よく殺されなかったね？　いつもならぶちぎれて殺しそうなのに」

「さあな。気違いの考えてることなんか理解できるか」

ノワルーナと弟は仲が悪いらしい。弟がルーナの傍にいる全てが許せなかっただけで、ノワルーナはたいして何も思っていないかったが、毎回毎回殺気を向けられれば流石に嫌う。

「でも、弟だから。唯一の肉親だから。見捨てる気はないよ。ああなったのは、きっと私のせいだしね……」

少しだけ、ほんの一瞬、ルーナの表情が曇った。次の瞬間にはかりりと笑っていたが。

ノワルーナはルーナのために、気のせいだと思うことにした。隠しておきたいなら、触れられたくないならば無理に言う必要はないだろうし、何より本当に大切なことは言ってくれるだろうと、そう信じていた。

自分は人形でしかないくせに、と自嘲気味に。

そうやって思ったそのとき、どこからか走ってきた幼い子供が、ルーナの目の前で転んだ。笑い話ではなく、ようすを表すなら、ず

るるる、と。

「ひゃう……!?!」

いきなりのことだったために、流石の二人も驚いていた。ルーナの前を横切るように顔から地面に飛び込んでいくそのようすには、流石に。

涙目で顔をあげる子供は、見事なほどに鮮やかな緑の髪と瞳を持っていた。だが、何故かその瞳は焦点が合っていない。

「う、ごめ、なさ……!」

「いいけど、大丈夫? ほら、額がさあ、痛そう」

ルーナは擦りむいて血が出ている子供の額に手を当てる。そのようすを見てノワルーナはぎよっとしていた。子供は嫌いなくせに、珍しい。

子供は上手く喋れないのか、何故か呂律が回っていないかった。

「……《再生》」

「……!?!」

ぼつり、とルーナが呟く。それと同時に子供の額から傷が消えた。それほど深い傷ではないため副作用の熱と痛みはないだろうが、子供はぎよっとしたようすでルーナを見る。

相変わらず、焦点の合っていない眼で。

「る、ルーメ、さま……?」

「え——?」

驚いたようすのまま、子供は言う。その「名」にルーナは目を

見開いた。

何故、その名を知っている？

問いかけようと口を開くが、どこからか甲高い女の悲鳴が空気を振るわせた。

「何だ？」

「ノワ、嫌な予感、当たったみたいだよ？ ……行こうか。君もね」

「え、あ、はい……？」

ルーナは珍しく真剣な表情で言い、悲鳴の方向へ歩き出す。ノワルーナはその言葉に嫌々ながらも従った。ルーナの嫌な予感が当たるなど、碌なことがないのだから。子供はわけがわかっていないようすだったが、ルーナに手を引かれてついていく。

ああ、絶対に、碌な結果は待っていない。

5 人形の嫌悪（前書き）

多少流血表現有り（？）

本編ではあまりグロくする気ないので、淡々と描写少なめです。
嫌いな方はすみません。

5 人形の嫌悪

「——ああ、もう、やっぱり……」

頭を抱えてルーナは言う。無意識に出た、悲痛な本心だったが、ルーナたちの視線の先には、もはや狂騒としか表しようのない大惨事が広がっていた。

転がる首。地を這う血溜まり。逃げ惑う人々と、それらの悲鳴。

「おい、ルーナ。これは、もしかして」

「そのもしかして、だろうねー。もうやる気すら起きないよ、まったく」

短い会話を交わし、そして同時に深い溜め息を吐く。ノワルーナは面倒臭そうに、ルーナは呆れたように。

子供は何故か恐怖はあまりないようで、あわあわと落ち着きのないうすで辺りを見回す。

「さて、久しぶりにお説教しますか」

「暢気に言っただけで早く止めるよ。お前の言うことしか聞かねえだろ」

「え？　だって、ほら」

ルーナが目の前惨状を指し示した瞬間、地面が凍った。ばきばき、と音を立てて、まるで草木が高速で成長しているかのよう歪に。

まるで、氷の森。

人の足場を奪い、ルーナたちが通れそうな所はどこにもなかった。

「うわぁ、前より凄くなってる。かなり機嫌悪そうだねえ」

意地悪そうにルーナはにい、と笑った。手には黒い扇子。それを広げ、ばしん、と強く閉める。

同時に、ごう、と炎が舞った。

いきなり氷の森の中心に現れたそれに、子供はぎよっとする。炎は氷や血を巻き込みながら、その勢いを増していく。

血が蒸発したのか、熱気と共に噎せ返るような鉄の臭いが充満した。周りの人々の悲鳴と困惑の音が響く。

「あははは。燃えちゃえ」

「……やっぱり姉弟だな」

「これで来るでしょ。ほら」

悲鳴が響く。【白氷の呪術師】だ、という、恐れを纏う声が。

ノワルーナはあからさまに嫌そうな顔で、ルーナは笑ったまま、子供は驚いたような困惑したような表情で、そちらを見やる。

白い少年がいた。

髪も服も、全てが純白。灰色の瞳には感情がなく、美しい容姿も相まって人形のような。左手にある鈍色にびいろの、少年の背丈には合わない大鎌にべったりと付いた赤い血だけが、異様に鮮やかだった。

【白氷の呪術師】だった。恐ろしく、無情な。

「る、ルーメさま！　だめですっ！！」
「……シルワ？」

子供が出した大きな声に、少年は少しだけ表情を動かした。
そして、それと同時にどこからか男が、おそらく生活用品である
う斧を持って、後ろから少年に迫る。

「よくも兄貴を——」

言葉が最後まで紡がれることはなかった。びしっ、と男の足と手
が凍り、一瞬止まった間に少年が大鎌で断つ。

血が、舞う。悲鳴が、大きくなる。

崩れ落ちた死体を少年は見やる。まったくの無表情のままで一瞥
し、視線を子供に合わせる。

「まったく、どこにいて——」

少年は言葉を止める。そして、始めて無表情を歪めた。視線の先
にはルーナ。

少年は驚愕の表情で絶句している。まるで、死人にでもあったか
のように。

ルーナは前に出た。絶句したままの少年に近づき、右手を上げる。

——ばしっ、と少年の頬を打つ。

周りの人間と子供が、恐れるように息を呑む。殺される、と誰も
が思った。

あの白氷の呪術師に、手を上げたのだから。ノワルーナとルーナ
と、少年以外はそう思っていた。

「ルーメ、いい加減にしろ。殺すよ?」

珍しくどすの利いた低い声で、表情は笑ったままにルーナは言った。ノワルーナは何故か腹を抱えて笑っている。

ざまあみろ、と、ノワルーナは心の中で呟いた。

未だ固まったままの少年が、引きつるように声を出す。

「——ねえ、さん?」

小さな声は近くにいたルーナにしか届かなかった。周りは未だに息を呑んだまま、ルーナがどうなるのだろうかと見ている。

ルーナは腕を組んで偉そうに自分より少しだけ背の高い少年を見る。

「自分の姉の顔も忘れたの? ルーメンルーナエ」

「……忘れるわけがないよ。ルーナスレスケンス」

確かめるように、互いの名を呟く。省略しなかったのは、ルーナのただの気まぐれだ。少年もそれに便乗したに過ぎない。

そして、二人同時に笑った。ルーナの笑顔には珍しく悪意がない。少年も、楽しそうだった。いや、嬉しそうだった。

「おはよう。五百年ぶりだね、姉さん」

「そうだね。まったく、禁術にまで手を出してこの愚弟め」

「厳しいなあ。これでも嫌々闇にまで頭を下げただけど?」

「げっ。ノクスまで手を貸してたの? 起こしたら怒ろっ。うん」

ほのぼのと紡がれる会話は、辛うじて周りには聞こえていなかった。ただ、その笑顔と雰囲気には困惑している。

唯一その会話を聞くことのできたノワルーナは、盛大に呆れた。

これ以上ないほどに呆れた。

にこにこと普段は滅多に見れない二人の笑顔だが、何もこんな所でなくてもいいだろう、とノワルーナは思う。寧ろ、人を殺しておいてやるな、と。

「ルーナ、場所を考えろ、場所を」

「ん。それもそうだねえ。ルーメが殺しちゃったし」

「あはははは。しょうがないね。——カニス、シルワ」

びくつ、と子供が反応する。慌てて少年の近くに寄った。不意に、頭上を黒い影が横切る。

少年の傍に着地したそれは、黒い大きな犬だった。

「わあ、魔獣だ〜」

「説明は後ですよ。さっさと場所を移そうか。じゃなきゃ全員殺す」

「だから駄目だって言ってるでしょ。人の話聞してる？」

「ふふ。姉さんとの会話の方が大事だよ。邪魔をするなら皆殺しに決まってるじゃないか」

あまりにも極端すぎる弟に、ルーナは溜め息を吐く。心の底からそう思っているらしいので、救いようがない。

ルーナはノワルーナを見た。

「変わってねえな」

「うん、変わってないね」

「寧ろ悪化してないか」

「うん、悪化してるかもね」

「……早く町を出ねえか？ 視線が痛い」

「うん、だから抱きかかえて走って？」

「……」

少年が子供と共に黒犬に跨っているのを見て、ルーナはノワルーナに言う。つまり、運べ、と。

ノワルーナは少し黙り込み、諦めたのかルーナを抱えた。そして、そのまま走る。

周りの視線が、痛かった。

6 人形の考察

【白氷の呪術師】。昔から人々に恐れられる、ルーメンルーナエの、ルーナの弟の通り名。

気に入らなければ皆殺し。邪魔だと思えば切り捨て、使えそうだと思えばどんな手段を使っても屈服させる。

魔力はルーナに及ばずとも、呪術に関しては天才的で、魔術を得意としていた。

人と会話をしようと思わず、大体は殺してしまつたためあまり顔は知られていない。ただ白い容姿だけが有名だった。

曰く、白い悪魔。

あまりに危険で強く、そのために国も放置している、そんな人物だ。

だが、一番おかしいのはその思考だった。

ルーナ以外はどうでもいい、と。狂った思想だった。

故に彼への評価は「狂人」といったところだろう。

「これが一応使い魔のカニス。これは大分前に拾った【森人】のシルワ」

「あ、あの、よろしくおねがいします……」

ペこり、と子供は頭を下げる。おどおどとしているのが、ルーナにとつては新鮮だった。

力がないにも関わらずルーメの傍にいて生きているなんて、と微妙にずれたところに感心していた。

黒く大きな犬は微妙な雰囲気でルーナとノワルーナを見ている。主である少年が笑顔なのが不可解で仕方ないのだろう。何せ、普段はまったく笑わないのだから。

「うん。私はルーナだよ。こっちはノワルーナね」

「ふうん、まだ壊れてなかったんだね、人形」

にい、と悪意を孕んだ笑みでルーメは言う。悪趣味なそれは、ルーナとそっくりだった。そういう根本的なところは二人とも似ているのだ。

ノワルーナはそれを無視する。ルーメに付き合っているといつか死ぬとわかっているからだ。

狂人に付き合う義理はない。

「ルーナ、あの二人はどうするんだ？ 町を抜けてきちまったが」
「ん、そうだねえ。ルーメがいるから、はつきりいってもう不要だよ。でも約束を破る気はないしい？」

自分から取り付けた約束を破るなんてそんなことしないよ、とルーナは笑って言う。妙なところで律儀なのだ、この魔女は。

町から少し離れた草原の中心に立つ二人の姉弟は、異様な存在感を持っていた。

白と黒。相反するもの。

「そうだなあ、私はルーメに連れて行ってもらうから、あの二人呼んできてよ」

「はあ！？ 何で俺が、というかあの場所に戻るのか？」

「ほら、私たち目立ちすぎたし。こっそり行ってこっそり帰ってくるの、ノワならできるでしょ」

先ほどとんでもない状況を作り出しておいでよく言う。元凶はルーメなのだが、本人は何食わぬ顔で笑っていた。

結局ルーナの下僕でしかないノワルーナは逆らうわけにもいかず、大きな溜め息と共に頭を垂れた。

「あー、行けばいいんだろ、行けば」

「うん。じゃあ、そういうことで」

少し遠くなった町に向かって、無気力にノワルーナは歩き出す。急ぐようすは微塵もなく、気だるげな雰囲気だけがひしひしと伝わってくる。おそらくは故意の嫌がらせだろう。

びゅー、と風が吹く。妙な沈黙があった。

「で、姉さんは闇を起こしに来たの？」

「そうだよ。私が行かなきゃ起きないでしょ、あの人」

「ふうん……。あんなもの放っておけばいいのに」

棘を隠そうともせずルーマは言う。ルーナがノクスを気に掛けているのが気に入らないらしかった。

いや、そもそも、全てが気に入らないのだろう。彼の世界は比喻ではなく、ルーナ中心に回っているのだから。

「まあ、そんなこと言わないの。ほら、道案内よろしくね？」

「……姉さんの頼みなら、断らないけど」

しぶしぶ承諾したルーマの表情は嫌そうだ。ルーナも苦笑している。

子供——シルワは、きよろきよろと二人を交互に見ていた。やることもなく、二人の会話にも入れずにいたためだろう。黒犬はルーマの傍で座っていた。流石忠犬である。

「そういえばさあ、この子どこから攫ってきたの？」

「何で攫ったっていう前提なの、姉さん。攫ってないよ？ 拾っただけで」

「……私にはその違いがよくわからないけどねえ」

ルーナは弟が人を連れていることに驚いていた。黒犬は使い魔だからわからないでもないのだが、人は、しかもこんな気弱そうな子は、どう考えてもおかしい。

小さなシルワの頭を撫でながら、ルーナはルーマを見る。

「シルワは、ルーマさまに助けていただいたんです。だ、だから、その、さらわれてません……」

「ふうん。ルーメ、また変なこと考えてないでしょーね？」
「……さあね」

俯いてぼそぼそと言うシルワを見て怪訝に思ったルーナは、わざとらしくルーメに問う。ルーメはあからさまにはぐらかした。ルーナは問いただしても無駄だと思ったのか、すぐに話題を変える。

「それと、この子目が見えてないの？」

「……ああ、うん。見えないらしいね。ただその分【森人】としての力が強いみたいだけど？」

【森人】は自然の声を聞く一族だ。古くは魔獣との関わりが深かったらしいが、ここ数百年で数が減っている。

それらは人間の所為なのだが。

シルワは焦点の合っていない目をルーナに向けた。盲目だかららしい。

「そうかあ。ルーメに会うまで大変だったでしょ？」

「え、あ、はい。シルワは、人じゃないから……」

おどおどと答えるシルワのようすを見るには、かなり虐げられたのだろう。表情には苦痛が混じっていた。

シルワの頭を撫で続けているルーナの表情には、愁^{うれ}いが含まれていた。人に罵られ蔑まれる苦痛は知っている。人に化け物と指を指される苦痛を知っている。

「……さて、そろそろ行こうか。道案内よろしく」

「はあ。姉さんに使われるのも久しぶりだね」

「使うなんて酷いな」。あはは

棒読みでルーナは笑う。おそらく使っている自覚があるのだろう。
ルーメも口ではそう言うが、満更でもないように苦笑していた。
これが、五百年前の二人の関係だった。

—— 本当は違うとしても、表面上は。

手（前書き）

読まなくても大丈夫な番外編。
本編と雰囲気が違うのでご了承ください。

手

「――何？」

白い少年は、自身の服の袖を引く手にそう言った。

廃れた町の裏路地で、空には白い月だけがぼっかりと浮かんでいる。病的なまでに白い少年の肌と違い、その手はかなり汚れ傷ついていた。

幼い子供だった。荒れ放題の髪は汚れで元の色がわからず、服もぼろぼろ。性別の判断もできない。

「たすけて……」

消え入るような声だった。辛うじて搾り出されたその声と、瞳は焦点があっていない。

そのようすにも、白い少年は軽蔑の視線を向けるだけだ。哀れんでいるわけではない。視線は冷たいだけだった。

「嫌だね。自分で這って生きるといい。もしくは勝手に死んで」

冷たい声。少年に同情などという感情はない。哀れみも同情も思
いやりも、少年は持ち合わせていなかった。

少年は世界の全てが嫌いだ。全てを否定し、全てを拒絶し、全て
を壊す。

対象外はたった一人、愛しい者だけ。

「ま、まって……！ さがしもの、あるんでしょう……？」

立ち去ろうとした少年に、子供は言う。その言葉に少年は立ち止
まった。

視線を向けられた子供は一瞬怯え、その様子を忌々しげに少年は
見る。

「……何を知っているんだい？」

「か、かぜが……、もうすぐって……」

射抜くような少年の視線に怯えながらも言う。当の本人は少し表
情を歪めて、溜め息を吐く。

「自然のもうすぐは曖昧すぎる……。数時間後か、数百年後か……」

言いながら不機嫌そうに眉を顰め、そしてすぐにいつもの無表情
に戻る。

感情が全て一瞬で削ぎ落とされた。

「……ああ、君は【森人】か。混血児なら忌まれるのかもしれない
ね」

「あ……」

「おいで。助けて、がどという意味かは知らないけど」

くるりと振り返り歩き出す少年に、戸惑いながらも子供はついていく。少年は子供のことなどどうでもいいようで、弱りきった子供には早い速さで歩いていく。

何度も躓きそうになりながら、子供は必死についていった。

どれだけ歩いたか、少年の背だけを見失わないように追いかけていった子供にはわからなかった。

もう町から離れ、平原にいる。月明かりだけが照らす闇が広がっていた。

「——カニス」

風が、ざわめく。

そのざわめきは子供にしかわからないものであったが、はつきりと空気が変質していた。

少年の影が揺らめき、溶け出すように大きな黒犬が現れる。それが何か、子供は識^しっていたために身震いした。

獣などではない。これは、もっと恐ろしいもの。

「行くよ」

さっ、と黒犬に跨る。子供は自身に向けられる視線に一瞬戸惑ったが、他に選択肢がないことを思い出して近寄る。

「別に危害は加えないよ。従順な忠犬なんだから」

おどおどしている子供を見ながら言う。面倒臭くなったのか、子供の体を無理矢理引っ張って乗せた。

びくつ、と子供の体が跳ねる。

「帰るよ」

次の瞬間には黒犬は駆け出しており、子供は心の中で大きな悲鳴を上げていた。

それを無視して走る黒犬と、どこか遠くを見つめる少年。

「——使えるものは、全て使わなくては、ね……」

風に掻き消された声を聞くものは、誰もいない。
少年の真意を知る者は、どこにもいない。

人形

「———　　つたく、人使いが荒えんだよ……」

ぶつぶつと独り言を言いながら、ノワルーナは歩いていた。機嫌が悪いのは明らかで、黒々とした雰囲気纏っている。

ノワルーナは一番嫌いなルーマと会っただけでなく、正直なところルーナを取られたような気がしていた。心の中では否定していたが。

ルーナは何だかんだ言っても、ノワルーナの主である。たとえばそれだけ非情だろうと非常識だろうと。

そうして歩いている内に、ふと気づいて足を止めた。

「……　　そういえば、あの二人を置いてきてよかったのか？」

いろいろな意味であの二人を揃えておくと碌なことがなかったことを思い出す。

自由人なルーナは行く先々で問題を起こす。本人にその気がなくても起こるある意味巻き込まれ体質なので最悪だ。

ルーマは言わずもがなルーナのこととなると見境がなく、二人でいる場合必ずといっていいほどに何か起こす。

他のことに気を取られて判断を間違っただけ、と気付いたが、

「……　　忘れよう」

責任は回避することにした。

「やっぱり貴方たちですか」

冷やかな目でラウルスに見られているノワルーナは、何故自分ばかりがこんな目に遭うのだろうか、とどこか遠くを見つめていた。ルーナのしたことへの後始末は大体がノワルーナに任せられる。

「今度は【白氷の呪術師】ですか。かなりの大物が出てきましたね」
「わかるだろ？ ルーナの周りはおかしい」

「……まさかあの白い悪魔が出てくるとは思いませんでしたけれど」

ノワルーナたちからしてみれば何の違和感もないが、ルーメは五百年以上生きている。世間からは謎の多い化け物扱いだ。

ラウルスも心中ではかなり驚いているのだが、顔にあまり出ないため無表情にしか見えない。寧ろ後ろで寝ているアケルに対する怒りで顔が怖い。

「それで戻ってこれないから連れて来いだと」
「まあ、私としても立場上【白氷の呪術師】と関わるのはご遠慮願いたいですね。いいです。……それよりも」

ぎろり、と後ろですやすやと眠っているアケルを睨みつける。
もはや、凶眼。

「いい加減にしないで。貴女は寝ることしかできないんですか……」
「……ふえ……？」

呑気に目を覚ましたアケルは、未だうとうとしたままラウルスを見——完全に覚醒して跳ね起きた。そしてその勢いのままにこける。

ラウルスがきれるまで、あと数秒。

人形（後書き）

投稿一分後に誤字を発見。

うわぁ……、誰も見てないよね？

I n t h e d a r k (前書き)

Ⅱ 闇の中で

毎度毎度の読まなくてもいい番外編³。

雰囲気的に題名を英語にしたものの、これからも翻訳サイト様にお世話になるのだろう(↑)

In the dark

その場所は、鬱々としていた。

淀んだ空気が渦巻き、悪意で満ちている。

「——世界は、何故こんなにも美しく醜いのでしょうかね」

ふと、闇に溶ける声が滲む。

ただただ暗い、闇の中に。

「……ふむ。その問いは主観によって大きく左右されるものだ。お前にとつては「美しく醜い」らしいが、私にとつては「研究対象」でしかない。いや、「美しく醜い」とは矛盾した内容だな。相反したものを生み出す「感情」とは中々に興味深い」

別の声が、どろりと闇に溢れた。

ねっとりと絡みつくような、意識を奪われそうな、そんな声だった。

闇の中で交わされる会話。二つの声は、どちらも異様だ。

どこか人間離れた、そんな声。

「相変わらずですね」

「高が五百年程度で変わるような【方向性】ならば、顕在化などしない」

「わかっていますよ、【強欲】。貴方の知識欲は徹底していますからね」

普通の会話だ。

だが、その中には得体の知れない何かがあった。

例えるなら、そう。人を真似て擬態しているような、そんな会話。全てを真似ても、所詮人でないものは人ではない。

「それはお前もだろう、【悲哀】。嘆くことに何の意味があるのか、私には理解できないがな」

「その割には協力してくださいませね」

「【世界】の果てには興味がある。終末がどのようなものか。お前自身もな」

くすくすと滲む声は笑う。

優しそうな声だが、どこかぎこちなかった。違和感がある。

「ええ。私が望むものは終わりです。消滅ではなく」

じわり、と声が滲む。

「私には理解できぬな。終結も消滅も死も、究極的には同じだといふのに」

どろり、と声が溢れる。

「いいえ、違いますよ。私たちの終わりには、何も残らない。それは結末ではない」

その声にはさきほどの違和感はなく、本心であろう。
ただ、それを彼らが理解することはない。

「何も、ない。そんな終わりは哀しいでしょう——？」

真実など誰も知らない。
あるのは、ただ事実だけだった。
それすらも、幻。

1 闇の神殿（前書き）

説明文は流し読みでも大丈夫だと思います。
多分。

1 闇の神殿

「——ホント、ここはまったく変わらないねえ」

苦笑気味でルーナは言う。目の前の光景は、五百年前と何ら変わりはない。

黒い石造りの神殿。【世界の闇】を祀り、管理し、監視するための檻。

ひどく重い空気の漂う、あまりにも暗い神殿。

「そうかな。前に来た時よりも暗いけど？」

「……そうだね。何かあったのかな」

きょとんとしているシルワの上で、二人にしかわからない会話をする。ルーナは首を傾げていた。そして何かに気づいたかのように目を細める。

「何これ、気持ち悪い。……悪意？」

顔を顰めて嫌そうな表情。ルーナには、何かが見えているらしい。もしくは、感じている。足元のシルワが、突然体を強張らせた。

ルーナの見ている世界は、実のところ普通の人間とは違う。ルーナの眼は「概念」を映している。それはあまりにも異様で、異端だ。

風の中に「魔力」を見る。夜の中に「闇」を見る。人の中に「感情」を見る。奇妙なその眼を【魔眼】と呼んだのは誰だったか。ともかく、その眼には何かが映っているのだろう。

例えば、瘴気、とか。

「シルワ、何か聞こえたのかい？」

「……さ、さげびごえ……？」

「そっか、その子は【森人】だったね。だったら、わかるか」

にい、と好戦的にルーナは笑う。それは明らかに敵を認識した笑みだ。怯えたようすのシルワはびくびくと神殿を見る。ルーナにもわかっていた。

何か、いる。

「どうしてかなあ。五百年で顕在するほどの悪意なんてないと思うんだけど」

悪意は方向性だ。五百年前の事件は【世界の光】を呑み込むほどの負の方向性が溜まりに溜まった結果だった。妬みや恨みといった方向性が力を動かしたのだ。

あれは数百年で起こるような事象ではない。

それこそ世界を巻き込む戦争や疫病などが起こり、多くの感情が動かなければ。

「別に何も無いよ？ この五百年は姉さんを犠牲にして馬鹿馬鹿しい平和に浸かっていたからね」

「うん……」

毒を孕んだルーナの言葉を気にするようすもなく、ルーナは考えることをする。

【世界の光】は確かに壊した。大きな事件も何もない。

——ならば、何故？

「浄化するものがなくなっただけ？ 違うな。あれは元々浄化じゃなくて鎮めるためのものだし、溜まっていた悪意もろとも壊したからいらないよね。そもそも【崩壊】の所為だよ、あれ」

【崩壊】とは、昔栄えていた文明の終わりに起きた世界規模の戦争だ。ノクスたち古代人が滅んだ、大戦。

ノクスはそのことについては硬く口を閉ざしている。思い出すことも嫌らしい。

ただ【世界の光】はその時にできた負の方向性を鎮めるものだということは、ノクスから聞いていた。

「【魔物】だね。アレは醜いから嫌いだよ」

「……ルーメ、そういうことは言わなくていいから……」

ルーメの言葉にルーナは顔を顰める。よほど嫌なことを思い出したらしい。

【魔物】は負の方向性が何らかの力を得て顕在化したものだ。【闇】や【光】、【魔力】といった力そのものに方向性が付いた結果。

ルーナが顔を顰めたのは、その容姿だった。

正しい過程を経て生み出された生き物ではないために、その姿は異様なものが多い。人の部位をばらばらに繋ぎ合わせたものや、形すらない不定形のものなど、見るに耐えない。

稀に強い方向性を持って生まれた、ほぼ人型の【悪魔】と呼ばれる変種も存在するのだが、その数は圧倒的に少ない。それほどはつきりとした方向性を持つことは珍しいからだ。

「あゝ、やだやだ。またアレを相手にしなきゃいけないの？ ルーメ、私魔力落ちてるからよろしくね！」

「わかってるよ。自分より弱い姉さんの手なんて煩わせないから。」

……「ゴミ掃除は面倒だけどね……」

ぴくり、とルーナは笑みを引きつらせたが、反論はしなかった。

あながち間違いではなかったからだ。それに、ゴミ掃除という言葉に呆れていた。

どうしてこう、ルーメの言葉は刺々しいのだろう。

「どうしようか、これ」

「え、あの……」

「これってねえ……。まあ、危険だから連れて行きにくいけど……」

これ、と見られたシルワは、いきなりルーメに見られたことで驚いている。完全に物扱いしているように、ルーナは呆れた。

「別にどうだっていいけど。姉さん、僕もこの中は知らないからね」「ええ。神殿の中なんて忘れたよ？ あ、闇の深い方に行けばいいのか」

ルーナは軽い足取りで神殿に入っていく。それについていくルーメを、一瞬きよとした顔で見ていたシルワが、気が付いて慌てて追いかけた。

「あ、そついえばあの魔獣は？」

「とても今更だね、姉さん。影の中にいるよ」

「ふうん。使い魔か、懐かしいねえ。私にはいないし。ノワで充分だし」

ルーメの言葉と共にぐにやり、と影が歪んだ。後ろにいたシルワがびくつ、と跳ねる。足元の影に驚いたのだろう。ルーナはそのようすを見て苦笑していた。

こつこつ、と神殿に足音が響く。中は異様なほど暗く、闇が濃い。ルーナは臆することなく進んでいく。ルーメは無表情で、シルワだけがびくびくと怯えていた。

今のところ何もいないが、奥には確実に何かがいる。

「闇が濃いねえ。ノクスがいるわけでもないのにさ」

「……姉さん」

「わかつてる」

がちや、と鎌がルーナの視界に映る。ルーメの手に握られる、鈍色の大鎌。

無表情なルーメに反し、ルーナは笑っていた。

それはそれは、悪趣味な笑みで。

「さてさて、何が出てくるかな？」

足を止めているルーナたちとは違う足音が、響いた。こつこつと、寧ろあまりにも響きすぎている足音が。

びくつ、とシルワの体が跳ねる。顔は恐怖で彩られていた。ルーナも笑いが少し強張る。ルーメだけがずっと無表情で先の暗闇を睨んでいた。

「——【月影の魔女】に【白氷の呪術師】か。ふむ、滑稽な組み合わせだ」

どろり、と声が聞こえた。低く、昏く、地を這う声が。

ルーナは一瞬目を見開き、そして嗤う。
今までで最も悪意に満ちた表情で。

「歪だ」

にい、と悪趣味な笑みを浮かべて。

「歪んだ、愚者だ」

暗闇の中の『ソレ』が、笑ったような気がした。

2 闇の顕現

暗闇から現れた『ソレ』は、黒衣を纏っていた。

黒いフードの下には、病的なまでに白い肌と緑の眼が覗く。はみ出した長い髪は水色。

弱々しく見える風貌だったが、どこか威圧感がある。そして視線には、軽蔑が含まれていた。

「愚者とはよく言う。お前の方がよほど愚かだ」
「そう？　なら何なの、貴方は」

『ソレ』は何もない無表情でルーナを見る。言葉は重く、意識を奪われそうだったが、ルーナは反応しない。

「何」と問うか。ふむ、的確な判断だ。私に「誰」と問わなかったことは評価しよう」

「白々しい。貴方みたいなものが「人」であつてたまるか」

「自らも「化け物」と称されているのではなかったか？　まあ、そんなことはどうでもいいが」

『ソレ』は品定めをするような視線を三人に送る。目線が合ったのかシルワが怯えた。

一瞥してから鼻を鳴らす。見下しているようにも見えた。

「……やはり【扉】にはならんな。下準備は面倒だというのに。どちらにしろ必要か」

「姉さん、イラついてきた。殺していい？」

言い終わる前にルーマはその刃を振るっていた。『ソレ』はひよい、と後ろに避ける。床にきいん、と耳障りな高い音を響かせて鎌がぶつかった。

ルーマは避けられたことが気に食わなかったのか、空気に冷気が混じる。

「野蛮な。所詮は禁忌が生んだ「化け物」か」

「……ふうん？ 識^しっているんだ？」

「お前たちの出生など当の昔に調べた」

ひゅん、と空気が唸る。ルーマが鎌を振っていた。それと同時に床が凍る。

ばきばきつ、と乾いた音を立てて白い氷が生える。

「ちょっと、ここで暴れる気？」

「ふふ、あはは。殺さないといけないみたいだからねえ」

にい、とルーマが笑う。

目には狂気しかない。

ルーナはそれを見て無駄だと判断したのか、後ろに下がって辺りを見回す。他の道を見つけたのか、シルワの手を引いていく。

「え、あの」

「ルーマは放っておいても死なないしねえ。切れているみたいだし、関わらない方がいいって」

おどおどシルワはルーメを見、好戦的な笑みを確認してからルーナについていく。

そんなに心配することはないのに、とルーナは苦笑気味だ。だって、死ぬはずが、死ねるはずがないのだから。

「頼んだよ?」

「任されておくよ」

お互いに軽い口調で言う。それを合図にルーメは鎌を振り上げ、ルーナは歩き出した。

こんな場所で聞こえてはならないような音が後ろから響き、シルワは何度も振り返るがルーナは振り返らない。

「平気だよ。アレも殺せるようなモノじゃないけどね、ルーメの方がよっぽど殺せない」

「……?」

「だって、そういう禁術だもの。人が五百年も生きれるわけがない」
理解できていないようすのシルワだったが、ルーナは笑うだけだった。

どれほど歩いたか、闇は深まるばかりだ。

暗いのではなく、闇が深い。

「ん、ああ、ここか」

ルーナは扉を見つけ、開く。

広い部屋だった。中央には祭壇のような場所がある。

どこか神秘的で神聖なその場所に、ルーナは遠慮など一切せずに踏み込んだ。

「さて、かなり久しぶりだねえ。前に神官転がしながら入ったつきりかな？」

「え……？」

「いやあ、なかなか入れてくれなくてね？　ほどほどに痛めつけてやっただけ」

シルワはやっぱり姉弟なんだなあ、と何故か感心していた。迷いなく祭壇に上るルーナを、手を引かれながら見上げる。祭壇には黒い球体のようなものが浮いていた。

「うーん、ノクスってばホントに適当なんだから。丸はないでしょ、丸は」

ぶつぶつと独り言を呟きながら、ルーナはそれに手を翳す。ふわ、と黒い球体が揺れた。

そして、それと同時に薫のように闇が広がる。触手のような薫のような、黒い影が黒い球体から伸びた。

びくつ、とシルワは跳ねる。あまりにも突然だったからだ。

「ほら、迎えに来てあげてるんだからさ？」

影は部屋を覆っていく。それこそ壁や床一面が漆黒になった。何かが聞こえているのか、怯えているようすのシルワ。

部屋の全てが影に侵食されていく中、ルーナは不意ににい、と口を歪めた。

「……見つけた」

ぼつり、と呟かれた言葉。

だがそれはあまりにもこの空間には致命的なものだったらしく――
――ぴたり、と世界が停止した。
影も空気も動きを止め、少なくともシルワは世界そのものが止まったと、そう思った。

「久しぶりだね、ノクス。――起きて」

ずるう、と、ルーナの声に応えるように影が逆転収束していく。
部屋を侵食していた影が、撒き戻しのように急速に中央へ戻る。
だが、それは明らかに撒き戻しではなかった。ルーナの前に在ったのは、人だった。

『……ああ。久方ぶりだ――』

地を這うような、闇の声。
漆黒の姿、鮮血の瞳。

【闇】。

ノクスは鋭い眼をさらに細め、懐かしむようにルーナを見やる。
にこにことルーナは笑っていた。

ああ、ようやく。

「おはよう、ノクス。気付いたら五百年だよ」
「そうか……」

少し考え込むように黙り込み、それからちらりとシルワを見る。

ノクスの眼が怖かったのか、闇が恐ろしかったのか、すぐにルーナの後ろに隠れた。

苦笑するルーナと、まったく気にするようすのないノクス。

『……お前の弟もいるのか。よからぬ侵入者もいるようだが……消えたな』

「ん、そう？ ルーメと喧嘩中だったんだけど。逃げたならいいや」
『魔物の類だ。人型か……厄介な』

淡々としているノクスと飄々としているルーナは、傍から見れば妙な組み合わせだ。だが、実際は誰よりも友好的な関係を築いている。お互い面倒なことは嫌いだ。
ともかく、

「さて、行こうか」

につこりと微笑んだルーナに、ノクスは誰も気付かないだろう少しだけ、笑った。

3 闇の案内（前書き）

多少（？）の残酷描写有り。
血がどばどば、ただけですが一応。

3 闇の案内

「でもさあ、よく五百年も寝てたねえ」

かつかつ、とよく響く足音で歩いていくノクスは、後ろにいる少女たちの歩幅に合わせて進んでいた。
ふとルーナが口にした問い。

『……そうだな』

「うん。話が續かないのは健在なのね。わかってるからいいけど。
ところでまだ？」

『お前の弟は……もうすぐだ』

ルーメの場所まで戻っているルーナたちだった。ノクスはこの神殿内ならどこに何がいるかわかるらしく、案内をさせている。
ノクスの口数は少なく、自発的な発言はなかった。

「ほら、何で私は五百年も眠っていたの？」

『魔力が完璧に枯渇していた。残っていた魔力すら拡散していたからな、私が留めた』

「んう？ 要するに、器に穴が開いちゃったから一応修理しましたよー？」

『認識としてはそれでもいい』

「なるゝ」

ルーナの言っていることはかなり滅茶苦茶なのだが、ノクスはさ
らりと流している。一応ルーナは理解している。ノクスが今の会話
でそれがわかることが不思議ではあるが。

「あつ……！ ルーメ、さま」
『そこにいる』

ある角を曲がる。二人同時に言った言葉は、消えた。
それは目の前に広がる、あまりにも赤い光景に。

「——ああ、姉さん？」

振り返ってにつこりと笑うルーメ。

壁には、撒き散らされた赤い血。

ルーナの顔は若干引きつり、シルワはひつ、と息を呑み、ノクス
だけは変わらず無表情。

純白だったルーメの服はもはや赤い部分の方が多く、鮮やかな赤
はそれが散ってからまだ間もないことを示していた。白い髪も多
すぎる赤を滴らせている。

あからさまなホラーの現場に、一同が沈黙した。

「……る、ルーメさま、大丈夫、ですか……？」

「ふふ。これがいつもなら、誰にそんなことを聞いているんだい、
と言えるんだけどねえ……」

ふつ、と自嘲気味にルーメは笑い——ぐらり、と体が傾げた。
予期せぬ状況に、咄嗟に地面との間にルーナが割り込む。自分
よりも大きな弟だったが、元々華奢だったためにそのまま崩れるこ
とはなかった。壁に押し付けるような形にはなってしまったものの、

一応支えている。

珍しい弟のようすにルーナは自身をも赤く染めながら、あることに気付いて目を見開いた。

「ちよっ……！？　これ、ルーメの血！？」
「えっ？」

ルーナが見つけたのは、ルーメの服が破けているようすだった。よく見れば結構な数の切れ目がある。その下には、まだ新しい傷が見られるものもあった。

シルワが信じられないようすで声を漏らした。

「あはは……っ！　まさか、ねえ？　まさか僕が、こんな、……ははっ！」

「怖い！　怖いから！！　顔伏せて不気味に笑わないでよ！！」
「だって、さあ？　自分の血で染まるなんて……！！」

ルーナは自身に体重をかけたまま笑うルーメの顔は見えていない。他の二人も、その表情は髪に隠れて見えなかった。

「ふふ、あはは、あははははっ！　次に会ったら、絶対に殺してやる……！！」

「……ルーメえ、寒いよ？」

暗い昏い声に応えるように、周りの空気が冷気を帯びる。ルーメの肌も冷たいというのに、とルーナは体を寒さで震わせた。

そのようすを見ていたノクスが、ルーメを退かす。その扱い方には優しさなど欠片も見えなかった。重傷だというのに適当に床に置く。

「あ、え……！」

『無駄に血を流すな。早く治せ』

「あはは。酷いなあ……？　むかついてイラついてたまらないのにさあ……」

扱い方に驚いたシルワがあわあわとしていたが、ノクスはまったく気に掛けるようすはない。ルーナなど、重い荷物を下ろしたかのように伸びをしている。

だらだらと未だに血を流しながら、ルーメは暗く笑っている。

「ん……。そうだねえ。姉さん、これ治すのには結構時間が掛かりそうだからさあ……、先にそれ連れて行つてよ」

「……こんなところにこんな光景が広がったら、誰かショック死するんじゃない？」

『神殿を閉じておけばいい。放つておいても自力で出てくるだろう』
「そうしてくれるかい？　自分で閉じるのは、ちょっとしんどいかなあ……」

「え、え、あの……？」

今にも死にそうだが、三人はかなりさばさばと普通に応えている。シルワだけが普通におどおどと周りを見回していた。

ルーナはふとそのようすに気付き、笑った。苦笑の類だった。

「ああ、大丈夫だよ？　ルーメの体は禁術かけてるからさあ、この程度じゃ死なないんだよね。実際は生きてもないわけだけど」

「君に心配されるようなことは何もないよ。……でもさあ、姉さん。もうちょっと気に掛けてくれてもいいんじゃないかい？」

「調子に乗らない！　さっきはルーメが斬られてたから驚いただけ……！」

いつもより心なし気だるげなルーマが、わざとらしく肩を竦める。
血は流れ続けているようで、血だまりは広がっていく。

ノクスは数秒目を閉じて考え事をしていた。すっ、と目を開き、
ルーナを見る。

『……入り口に人形がいるぞ。他に二人ほど。知り合いか？』

「ん。ちよつといういろいろあつてねえ。じゃあ、出ようか」

「……シルワ。姉さんと行きなよ。家にでも送ってもらえば」

「あ、はい」

すぐにどこかに向かって歩き始めたノクスに、ルーナが付いていく。きよろきよろとついていけばいいのを見ていたシルワに、ルーマが指示した。

駆け足で走っていくシルワを、目を細めてルーマが見ている。

三人がいなくなった後に、独り残される。

少しの間、ぼんやりと去っていった方向を見つめていた。

「……あゝあ……、殺し損ねたなあ……」

ぼつり、と誰もいない廊下に眩きが解けていく。

ふ、と自嘲気味に笑った。

「——くそ……っ……」

その眩きを聞いていたのは、闇だけだった。
ただ反応はなく、沈黙。

4 闇の面倒

「——でね、神官さんが困ってるってさ」

「……どうでもいい」

「そんなこと言わない。一応あっちも仕事なんだって」

ルーマと別れてすぐにルーナはラウルスとの約束について説明をはじめた。だがノクスは興味がないよう。

そんな二人を、少し後ろからシルワが見ている。だが、それはいつものように性格的などころからくるものではなかった。

ルーナについていた、ルーマの血が消えていた。

まるで蒸発でもしたかのように、ルーマを支えた時に流れていた血が消えていた。だいたい多い量が、べつとりと付着していたのにも関わらず。

それを不思議に思い、そして不気味に思い、見ていたのだった。

「視えない者は理解できていないから視えない。理解できぬ者に闇は扱えん」

「いやあ、それはわかってるけどさ。あれは理解できないっていうより、知らないって感じただよ？」

「……無知は、罪だ」

「じゃあ、世界中の人が大罪人だね！」

「……」

けたけたと笑う。返す言葉がないのか、ただ単に呆れているのか、ノクスは言葉を返さなかった。シルワは会話が理解できないらしく、ただ二人を見上げている。

ふと、沈黙が広がった。

「……人にとつてね、闇とか光とか世界とか、そんなものは大きすぎて知覚なんてできないんだよ。同じ景色を見ていても、視線の先にあるものは違う。それにね」

ふ、と口の端を上げる。

「——視える者なんて、理解できる者なんて、碌な人間じゃない」

暗に自分のことを指しているのを、ノクスは知っていた。自分が愚かだと、そう思っていることを。

もはや人ではないノクスは、それを否定も肯定もしない。

『……出口だ』

「ん。あ、ノワとその他」

かなり酷いことを言いながら、外に出る。日はすっかり暮れていた。神殿の外に、あの三人がいる。いかにも機嫌の悪そうなラウルスを怯えた表情で見るアケル、そして盛大に溜め息を吐いているノワルーナ。

出てきたルーナに気付いたノワルーナが呆れたような顔をする。

「おい。遅えよ」

「ごめんね？ まさか乱入者がくるなんて思わなくて」

「中の闇は深いし、空気は淀んでるし。入んなくてよかったな」

「賢明な判断だよ。入ってたらルーメに殺されてただろうし」

愚痴をぶつぶつと言うノワルーナに、ルーナは気にするようすもなく告げる。するとルーメがいないことに気が付いたのか、怪訝な顔をした。

「アイツがいねえな？」

「ちよつと負傷中。中はいったら危ないからね、って、ノクス？」

ふとルーナが振り返ると、そこにいたはずのノクスがいなかった。そこにいたシルワに目を向ける。

「えっと……、きえちゃいました……」

「逃げたなあいつう！　いくら神官が嫌いだからって、会う前に消える？」

「……珍しいな。気付かなかったなんて」

「……ノワ、あとで仕置き」

「は！？　何で？」

「問答無用」

理由を問いただすノワルーナと、言わないというルーナ。そんな二人を冷たい視線で見ていたのは、ラウルスだった。その冷たいオーラに気付いていたのは、傍にいたアケルだけだった。

ようやく気付いたルーナが、げし、とノワルーナを蹴ってから言う。

「あ、おひさ？」

「……そうですね。まさか『白氷の呪術師』が出てくるとは思いませんでしたね」

「いろいろあるんだよ、いろいろ。まあ、ルーメと関わるのは止めといった方がいいけどね」

「関係は聞きませんが……約束は果たしてもらいます」

真剣な顔つきで睨まれる。ルーナは笑ったが、寧ろアケルが怖がっていた。シルワはラウルスとアケルを知らないため、きょとんとしている。

ルーナの隣で首を傾げたシルワに気付き、ルーナは満面の笑顔でノワルーナを見た。びくつ、とノワルーナが反応する。

絶対に碌なことはない、と顔に書いてあった。

「ね、ノワ？」

「……な、何だよ……」

「ルーメがさあ、この子を送ってって言ったんだよね」

「……で？」

「でも一人で帰すのは心配だしさあ。ルーメの家がまともと思えないんだよね」

「……つまり？」

「私の家に送れ」

「……はい」

につこりと笑顔で言われれば、ノワルーナは頷かないわけにはいかなかった。あとが恐ろしすぎるからである。

当の本人であるシルワは、驚いた顔をしていた。

「え、あの、その……、でも……」

「遠慮しないの。ルーメはあれだけどさ、他の人には甘えなさい」

「でも、そんな」

「いいんだよ。少しぐらい我が儘言っても。私が許されてるんだから」

「……お前は我が儘すぎるだろ」

「ノワ、殺してほしい？」

「遠慮する。似た者姉弟め……」

ぼそ、と捨て台詞のように呟いて、すぐにシルワを連れて行った。文句を言われる前に逃げたかったらしい。最近扱き使われる回数が増えていたような気がしていた。

さて、とラウルスを見る。ルーナとしては何も言ってこないのが意外だったのだが、案外子供には優しいのかも知れない。

「闇に関する知識だっけ？ 知識ってどういうことなのか、具体的に」

「……貴女の言った通り、もはや闇を知覚出来る者はいません。ですが我らにはそれを管理する責務がある。そのためにどうすればいいのか、です」

「どうって言っても、ねえ？ 本当はできることなんて何もないんだよ」

予想外の答えにラウルスは眉を顰める。憚られたかと思っているようだが、それも違っていた。ルーナは欠伸をしながら、更に言う。

「私の知ってる闇の神官は、それを知っていた。というより、そもそもそれを知ってる人間が闇を認識できるんだけどさ。取りあえずあの人は自分にできることは何もないから、ここを守っていた。つまりこの神殿に不審者が入らないようにすればそれでいいんだよ」

安直な答えを言い渡され、ラウルス是不機嫌そうだ。アケルはそれを見てひやひやしている。当の本人であるルーナは、そんなことなどお構いなしに眠そうに目を擦る。

「そんな顔されてもねえ。じゃあはつきり言ってあげようか？ 闇の管理なんてそもそもできない」

「な……」

「結局、闇に憎悪とか狂気とかを近づけなければいいんだよ。闇に負の方向性ができたら、五百年前みたいな暴走が始まるだけだし……ねえ？」

『ああ』

「「！！」」

突然聞こえたノクスの声に、ラウルスとアケルは驚愕する。さも当然かのように、ずっとそこにいたかのように、ルーナの隣に立っている漆黒の人影。

人形のように美しく白く、そして感情の無い無表情の美貌。生き物とは思えない無機質感がある。

「これはノクス。闇の人格だよ？」

にっこりと、面白そうにルーナは笑った。

5 闇の真実

「——人ができることなど高が知れている。どうしても言うのなら、あの神官と同じように神殿に人を近づけないようにすればいい」

簡潔に、そして面倒臭そうにノクスは言った。濃厚な闇の気配に、いや、そのものであるノクスに驚いている二人に向かって。闇の威圧感は相当なものらしく、二人は固まったままだ。

「闇も光も力に過ぎないからね。方向性、つまり感情を近づけなければ暴走もしないよ」

「……何、ですか。これは……闇？」

「うん。そういえば、ノクスって体もないんだっけ？」

搾り出したような掠れた声のラウルスを他所に、ルーナは一人で言う。闇に吞まれた際に体を消失していることなど知っているはずにも関わらず、わざとらしく問う。

ノクスは気にするようすはなく、アケルは驚きで口をぱくぱくと動かしていた。

「教えてあげたらいいのに。名前」

「……」

「そうそう。何かねえ、不審者がいたから。しっかり見張ってた方

「がいいよ」

ノクスが返事をしないだろうことは予想していたため、無視して話を進める。元々、教える可能性はかなり低いと知っていた。ラウルスのように一つのことを信じきっているような人間は駄目なのだ。全てを疑い、信用しない。そんな人間こそが闇の神官に相応しい。ルーナの知っている神官は、そんな人間だった。不真面目で人を信用せず、否定する。そんな人間。

「不審者、ですか？」

「そー。あれは多分【悪魔】なんだろうねえ。ああ、嫌だ嫌だ」

「【悪魔】……？ 実在するんですか？ 負の方向性の顕現……」

「するんだよねえ、それが。厄介だよ、核を潰さないと駄目だからルーメも負けちゃったしね」

ルーナの眼は魔眼だ。あれが人ではないことくらいわかる。あんな瘴気にまみれた欲望の塊が人間であるはずがない。

歪んだ愚者だと、ルーナは言った。

それはその言葉通りなのだ。愚かしい欲の塊。歪んだ悪意の坩堝かじょう。

「まあ、そのくらいかな。よし、ノクス、帰るよ」

『……ああ』

にこにこ笑うルーナを、無表情なノクスが一瞥する。くるり、と振り返る一瞬で、ノクスが溶け崩れた。闇が輪郭を失い、溶けて消える。後には何も残らない。

そのようすを見て、ようやくラウルスは闇の人格という意味を知った。驚愕しているアケルを置いて、一人考え込む。それすらも放置して、ルーナは一人で歩いていく。

「……ら、ラウルス様？」

「アケル。神殿の書庫を全て引きずり出しますよ」

「ええっ！？ あ、あの本の山をですか？」

「知る術は自分で見つけます」

何か心境の変化があつたのか、それともルーナに頼ることを諦めたのか、ラウルスは足早に神殿に向かう。アケルは数秒書庫の悲惨な状況を思い出して沈黙していたが、置いていかれたことに気付いて慌ててラウルスを追う。

神殿の書庫といえば、五百年前の光の神殿の事件から一切手を付けられていない知る人ぞ知る魔境だ。山のように積み上げられた膨大な書物たち。

「——悪魔の訪れは、悲劇の始まり」

ラウルスはどこかで聞いた言葉を口にし、それをしっかりと胸へ刻み付けた。

まったくもって、忌々しい。

血筋も、種族も、世界も。

「……」

ルーナは日の暮れ始めた赤色の空を背に、「その場所」に立っていた。家である塔に帰る道とは大きく外れた場所ではあるが、どうしても来たかったのだ。

そして、それには独りである今が最も相応しい。

「五百年と、六年くらい……？」

ふ、と弱々しげな嘲笑を浮かべて、年月に比べて何も変わっていない「その場所」を独り歩く。生い茂った雑草を踏み、赤い赤い夕焼けに照らされた「その場所」を。

そこは、廃墟だった。所々にだけ壊されたような石造りの家の残骸が見える。森の木々の間で不自然に開けた「その場所」は、青々と背の高い草が生い茂り、もう何十年と人がいないことがわかる。

元々の光景を知っているルーナには、その姿は何ともいえない虚無感があつた。

「——『化け物め』」

誰かの言葉をなぞるように、あまりにも無機質で嘲笑にまみれた言葉を口にする。

昔、まだ何も知らなかった頃のことを思い出しながら。

誰か、が誰だったのかすら、もうとつくに忘れているというのに。

——化け物は禁忌の果てに生まれたモノ。

誰がそんなもの、愛すというのでしょうか？

だって、ねえ？
化け物、なんだもの。

罪（前書き）

毎度毎度雰囲気が違う番外編です。
もちろん読まなくても大丈夫。

罪

少年がいた。

純白の髪と服、そして灰色の瞳を持つ、幼い少年が月を見上げていた。

周りは木々しか見えず、近くにある村の光さえも届かない。村に一番近い小さな湖の水面は空にぽっかりと浮かんでいる唯一の月を映している。月明かりを反射して、きらきらと光っていた。

少年は独りぼっんとそれを見ていた。

「なんで、なんだろう……」

今にも泣きそうな、哀しそうな表情を浮かべて呟く。すると、それに呼応するように蛍のような淡い光が少年の周りを舞った。今にも消えそうな、儚い光。

美しい光景だった。だが、少年はその光を忌々しげに睨み付ける。

「なんで、なんでばくなの？　なんで、おにいちゃんでもおねえち

やんでもなくて、ぼくなの!？」

年不相応な、悲痛な叫びだった。その叫びと共に光はすう、と消える。抑えきれない感情にぎり、と齒軋りした。

ふいに、草を掻き分ける音がした。少年は振り返る。

「やつぱり、ここにいたんだね。駄目だろう？ 夜中に村の外に行くのは」

「……おにい、ちゃん……」

少年の予想通りに、そこには兄がいた。自分よりも黒に近い灰の髪と瞳。苦笑している兄に、ばつが悪そうに呟く。

少年は村が嫌いだった。帰りたくなど、本当はなかった。だが、できない。

外の世界など知らない。

「ほら、帰ろう?」

「やだ」

「……どうして?」

「だって、したいことできないから」

兄は顔を歪める。弟の言葉は他人が聞けば不可解だが、兄である青年はよくわかっていた。つまりは、自由がないと言いたいのだ。

少年には力があるから。とてつもなく巨大で、とてつもなく危険な力が。

少年よりは弱いものの、自身も力を持つたためによくわかる。だが、それと同時に選択肢が少年にはないことも、知っていた。

自分がそうだったから。

「おねえちゃんもぼくも、したいことできないよ。どうして?」

「それは……」

「ぼくたちが「ばけもの」だから？」

「……！！」

今にも泣きそうな声で少年が呟いた言葉に、青年は絶句した。幼い少年が何故そんなことを知っているのか。

言葉を失った兄を、少年は見上げる。純粋な弟の瞳が、兄にとっ
ては辛かった。

責められているようで。見透かされているようで。

「むらのみんながいつてたよ。ぼくもおねえちゃんも、「ばけもの」
だって。おにいちゃんのことを、「できそこない」って」

「……！」

「やみはきけんだから、おねえちゃんとはじこめておくんだって。

ひかりはしんせいだから、ぼくははなしがいなんだって」

「……！！」

「ねえ。どうしておねえちゃんはいつもおりにいれられてくさりを
つけられてるの？」

頭によぎる、黒い鉄格子に囲まれた部屋。その中にいる、黒の色
彩を持つ妹とその足に嵌められた枷。そして妹の、それを自分が悪
いと思っっている許しを請う泣き声。

本当は、妹は何も悪くないのに。

悪いのは、力を求める愚かしい村人と、助けてやれない自分なの
に。

「……ごめん。ごめんね……」

「……どうしておにいちゃんがなくの？」

堪えきれない涙が、頬を伝って地面へ落ちる。ああ、なんて自分

は無力なんだろう！

ふわふわと少年の周りを光が舞った。光に愛された、弟の感情に合わせて。不思議そうに顔を覗いてくる少年の想いに合わせて。

「ごめん……、何もできなくて、守ってあげられなくて……ごめん……」

何故そんなことを言うのか、少年には理解できなかった。

——だが、今ならわかる。そして、赦すことは絶対に無い。

ふと、少年は目を覚ました。思ったよりも深い眠りについてたようで、それが傷の深さを思い知らせて、イラつく。

力が欲しい。もう二度と、愚者に屈することのない力を。

欲しいものを手に入れる力を。

自由のための、力を。

「……最悪な目覚めだ……。何で、よりもよって、あんな奴の夢を……」

自分が何も知らなかった頃の夢。大事なものが傷つけられていた

頃の夢。

自分が決別した、過去の夢。

「……さて、と。姉さんはどこかな……」

欺瞞だった。嘘で塗り固められていた。

自分の道くらい、自分で決める。この歪みさえも、自分だけのものだ。

罪の証なのだ。この狂気と憎悪は。

決して償われることのない、姉への贖罪の証なのだ。

永遠に続く、この体に刻まれた禁は。

「……全部、壊してやる……」

白い少年は、その大鎌を支えに力なく立ち上がった。

傷の消えた白い死人の体で。

覚悟を胸に。

秘密（前書き）

今回の番外編も以下略。
時系列に突っ込みはナシの方向でお願いします。

秘密

「——さて、本気でやろうか」

にい、とルーマが笑う。

どこか恐ろしいその笑みを、『ソレ』はただ一瞥するだけだった。

「ほう。そうか、それほどまでに隠し通したいのか？」

『ソレ』の無表情で無機質な瞳がルーマを映す。少し興味があるのか、さきほどよりは光がやどっていた。

ルーマは鎌を構えなおし、暗い笑みを見せる。

「お前が姉と自身の両親を殺し、村を壊滅させた」と

ルーマはただ笑っただけだ。
そして、それが答えだった。

「……別に、知られてもいいんだよ？ 姉さんと僕が禁忌の果てに生まれた忌み子であることも、僕がああ愚かしい村人と親を殺したことも、本当は姉さん以外を殺したくて壊したくてたまらないことも——姉さんがまた独りになればいいと思っっていることも」

暗い昏い、嗤い。

くつくつと、暗鬱に広がる。

「だって、ねえ？ 僕は姉さんが好きなんだもの。好きで、大好きで、愛してて。だからこそ不満だよ。僕の、僕だけのものになってくれればいいのに」

ばきばきばきつ、と床が凍る。ルーマは自身の体には大きすぎる鎌を振り上げ、『ソレ』に向かって振り下ろした。

「……狂氣的だな。だが、最も人間らしいか」

突如ごう、と風がうねり、大鎌もろとも体が後ろへ傾ぐ。ザシュ、と聞きなれた肉を裂く、血の散る音が聞こえた。

壁にぶつかってずる、と落ちる。ルーマは自分の体から血が溢れているのを感じた。

とても、久しい感触を。

「禁術を犯した身とはいえ、器自体は脆い肉か。体に描いてあるのは古代文字か？」

「……【悪魔】め。忌々しい……」

血が流れていく。再生が間に合わないのは、おそらくは【魔物】特有の悪意か瘴気のせいだろう。いつもならすぐに治る傷が治らず、鮮血が床を這う。

心臓など動いていない。当にルーマは生きていない。

だが元からあるものが失われることは少々厄介だった。ルーマが身に刻んでいる魔術は、禁術を施す前の状態を保つものだからだ。本来戻すものであって、再生するものではない。

ルーマの犯した禁術は、魂を器に永遠に繋ぎとめておくものだ。死者に使うものを生前に使ったため、通常よりも強力だが生きても死んでもいない。

器が壊れれば魂も壊れるため、ルーマは肌に直に古代文字を刻み、強力な維持の魔術を施している。たとえ四肢がばらばらになったとしても、元通りに戻るほどに強力な。

「姉以外は本当にどうでもいいらしいな。確かその禁術を使うと二度と転生できないのではなかったか？」

「まあ、ね……。永遠に奈落を彷徨うらしいねえ……」

「全て覚悟の上か。ひとつのために全てを捨てるか。愚かな」

何かをルーマが口にしようとしたとき、どこからか影が地面を這った。壁を、床を、天井を黒い影が埋め尽くしていく。

『ソレ』はふん、と鼻を鳴らした。

「闇の目覚めか……。これで【扉】が開きやすくなったか」

「……人外の魔物が、何を求めているんだい？ 君たちは存在自体が罪だろう？」

「【死人】が何を言う。それに、いずれわかることだ。鍵はお前たちなのだから」

ふ、と『ソレ』が笑う。

その笑みと共に、『ソレ』がぐにやり、と歪んだ。空間を裂くように、消える。

ルーマはそれを何も言わずに見ていた。

「まさか、今になって【悪魔】が出てくるなんてねえ……。厄介な」
ぼつり、と無感動な、虚ろな瞳でルーマが言う。

「……『——みんな、しんではまえばいいのに』……」

誰かの言葉をなぞるかのように、遠い記憶を思い出しながら呟いた。

ルーマは珍しく哀しそうな表情をしていたのだが、

「ふふ……、あはは……！　それが、唯一の本心だったのに、ね……」

本人がそれに気付くことはなく、嘲笑に掻き消された。
嘘を吐き続ける道化には、それこそが真実だった。
真実も嘘も、曖昧に消えていく。

The key to the door (前書き)

「扉の鍵を
以下略。」

The key to the door

「——どうでしたか？」

闇に声が滲む。

人を真似た、人外の声。

「そうだな。【光】の方は駄目だな。【闇】はいいのではないか？
表面を取り繕っているだけならば、すぐに崩れる」

どろり、と地を這う声が溢れる。

それは嘲りも罵りも何もない、ただの事実を述べる声。

闇の中の会話には何も見えないが、口の端をあげる気配があつた。

「そうですか。それはいいですね……。【扉】を開ける【鍵】となる」

「ふむ。脆いものは崩れやすい」

満足そうな、しかしそれすらも偽りの声が滲んだ。

『ソレ』はそのことに気付いている。
所詮は、見せ掛けの紛い物だと。

「では、私が行きましょう。崩すのは、私の方が容易い」

くつくつと、暗鬱な笑いが響く。

悪趣味な笑い方だった。

それを自覚しているが故に。

「そのためには最高の器だな。古傷を抉り出されるのは、どれほどの激痛か？」

「貴方好みの問いですね、【強欲】。痛みを貴方は感じないからこそ」

知識を求めるモノに向かって言う。

それはひどく悪趣味だ。

だが、痛みを知らないものが痛みを知りたがることを、誰が止められる？

「突き落とすことが、私のすべきことです」

ようやく仮初めの癒しを得たというのに。
彼らは絶望の崖から突き落とす。
闇の、底へ。

1 森の自宅

「たっただいまー！！！」

少女の声は大きくその塔に響き渡る。その場にいた幼い子供は驚きでびくつ、と硬直し、青年の姿をした人形は違う意味で体を強張らせた。

朝日を背に扉を開いて立っているルーナは、にっこりと笑う。

「あの……、おかえり、なさい」

「遅かったな」

おどおどと言う言葉を選びながらシルワが言い、ノワルーナは椅子に逆向きで座りながら気だるげに言った。シルワの服が変わっているのは、ルーナの服を引っ張り出してきたのだろうか。サイズが大きそうだ。

ルーナは無彩色の服を好むため、シルワの着ている服は真っ白だった。黒ではないのは、ルーメの影響だろうか。

「あ。やっぱり女の子だったんだ」

「そこかよっ！」

「毎度毎度飽きない突っ込みありがとう」

「……自覚あったのか……」

何故か引きつった表情のノワルーナを無視し、ルーナは目を輝かせる。理由は至極簡単、周りに女がいないからだ。ルーナはあまり容姿に頓着しないが、やっぱり可愛いものを愛でるくらいはする。

ルーメはルーナよりも適当だったらしく、こうして少し着飾ってみれば、シルワも可愛らしかった。鮮やかな緑が純白に映える。じっと見られているシルワは、きよろきよろと落ち着かないようすだった。

「ああ、やっぱり男に囲まれてるのは駄目だね。……何でノワルーナ男にしたんだろう？ 女にすればよかった」

「今から変える気じゃねえよな？ それは流石にねえよな？ 本気でやめてくれマジで頼むから」

「……………いやあ、流石にそれほど面倒なことはしないよぉ？」
「今の間は何だ」

あはは、と乾いたわざとらしい笑いを浮かべるルーナに、焦った必死の表情でノワルーナは言う。ルーナは結構本気で自分が何故女にしまったのか疑問に思っていた。

ふと閃いたような表情をルーナは浮かべる。

「あ、そっか。アルが男だからだ」

「は…………？ アル…………？」

「アルティフェクスだよ。史上最高にして最悪の人形師！ 共同でノワを作ったから、アルが男だから男になったんだよ」

びきつ、とその名を聞いた途端ノワルーナが硬直する。何やら思い出したくもないことがあったらしく、その口元は引きつっている。

ルーナは人形に詳しかったわけではなく、そのために友人に声を

掛けたのだ。それがアルティフェクスという、いい意味でも悪い意味でも名の知れた人形師だった。

やるからにはとことんやろう、という趣旨でできたのがノワルーナである。ちなみに二人とも本気で制作していたが、ほとんどその場のノリというやつだった。

ノワルーナが不憫なのは、創られた当初から変わらないのである。

「……あの……、かたまってます……」

「ああ、放っておいても大丈夫だよ。その内回復するって。……あの名前ノワには禁句だったの忘れてた……」

シルワが困惑したように言ったが、ルーナは手をひらひらと振って気だるげに言う。最後の言葉は聞こえていなかったらしく、シルワは心配するようにおどおどとしていた。

ルーナはきよきよと辺りを見回し、げし、とノワルーナを蹴った。椅子ががたん、と揺れる。

「っ！？ 何するんだよっ」

「さてさて問題です。魔法使いにとっての人形って何でしょ」

「……使い魔。もしくは道具」

「ピンポン！ というわけで道具に格下げされなくなかったらいうこと聞きましょう」

にこにことルーナは言っているが、ノワルーナにとっては死刑宣告だ。本気で言われているにも関わらず、いつも通りの反応をノワルーナは見せる。

つまり、またか、と呆れた顔を。

「今度は何だよ」

「いや、別にこれといっては。強いて言うなら、人が一人増えたの

でその辺よろしく」

「……炊事洗濯掃除……」

消え入りそうな声でノワルーナが呟いた。ルーナには聞こえていなかったらしく、呆れ顔もはや常になってきている。

いわずもがな、ルーナに家事は不可能である。

料理をすれば発火、洗濯をすれば雹が降り、掃除をすれば家が半壊になる。魔法以外に関しては極端に不器用だった。

「あゝ。そういえば五百年もメンテナンスしてないけど大丈夫？

オーバーヒートはしてないみたいだけど」

「ああ……。ここは魔力が多い土地だからな。別に平気だ」

魔力さえあればノワルーナは動く。そういう風に作ってあった。

しようと思えば食事も可能ではあるが必要はない。人に限りなく近いものを作れたかった、ルーナらしい。

ただ、人に近づかせすぎたためか、感情の暴走によってオーバーヒートすることがあった。ルーナはそれだけは危惧していたのだが、案外平気そうだった。

「ふうん……。ならいいんだけどねえ。止めるの面倒だからね？」

「わかってる」

「じゃあ散歩してくるー！ 五百年の変化が知りたくて仕方ないー！」

子供のように外に飛び出す。最初から行きたかったらしいが、いろいろあつて行けていないことに不満があつたようだ。

それを呆れた顔で見ているノワルーナは、ふと後ろにいたシルワを見る。ずっと二人を見ていたらしいシルワはいきなり目が合つて驚いたようだ。

ノワルーナは一瞬何故か沈黙した。

「あゝ、まあ、地下にだけは行くな。死ぬから」

「え……？」

「他は適当にしといていいぞ」

奥の部屋に向かおうとするノワルーナを、慌ててシルワは追いかける。

「あの、なにかおてつだい……」

一人住人の増えた塔。

2 森の銀狼（前書き）

説明回。

流し読み推奨（
↑

2 森の銀狼

日が昇り始めている、朝と昼の間の微妙な時間帯。
生い茂る木々の合間をぬって、ルーナは森の中を歩いていた。

「うわぁ。何か木の種類が違うような気がするんだよねえ」

たかが五百年で変異があるのだろうかとも思ってたが、実際に変わっているのが深くは考えないようにする。昔見た、意思を持った樹木のように害がないのだから。

人の手が加わっていない、自然そのままの木々は複雑に絡み合いながら成長しており、足元を気にしながら歩いていく。

「えっと、こつちが東だから、魔族領だよな。合ってるかな？」

人と魔族の住処を別ける【狭間の森】の奥深く。

そんなところに好んで住んでいるルーナは、よほどの変わり者だ。

【魔族】とは、人間以外の魔力を持つ者たちの総称である。
決して悪しき者の意ではない。その力ゆえに、人間に恐れられていても。

世界は【狭間の森】にて二つに別けられ、西に人が、東に魔が住

む。

それは不要な争いが起きぬためであり、保身のため。

【魔族】は【魔王】たちによって治められ、人の地に踏み出す者は少ない。

その一説を、ルーナは思い出していた。昔に呼んだ書物に書いてあったもので、何故か明確に覚えているその一説。

周りは人外だらけだったルーナは、もちろん【魔族】にも知り合いがいた。【魔族】の寿命は種族によっても異なるが、ほとんどが人間よりも長かったはずだ。

誰か生きているのだろくな、とその程度の認識である。

「また今度行ってみよう」と。それにしても、五百年経ってもここには人は寄り付かないねえ」

少しくらい開拓されてもいいかと思っていたのだが、そんな命知らずはいなかったらしい。

というのも、この森には【魔獣】が住んでいるからだ。

【魔獣】というのは【魔族】という種族の総称ではなく、魔力を持った獣の総称である。ただの獣でも魔力を持てば【魔獣】ということだ。魔力量によって寿命も強さも決まる、弱肉強食の者たち。ルーメの従えていた力ニスという黒犬もそうである。

「さっすがに五百年も生きれるくらい強い【魔獣】はいないかねえ？ 狼も兎も、死んだかな」

そんな場所に住んでいるルーナは、もちろん魔獣たちと知り合いである。いろいろあったことは言わずもがな。

ふと昔を思い出しきよろきよると辺りを見回す。すると不自然なほどに強い風が吹いた。ルーナの黒髪が風に靡く。

「——こら待てえっ!!」

かなりの怒りを含んだ声が、森に響き渡る。風が吹いてきた方向を見やると、銀髪の少年が遠くにいた。遠目にしか見えないが、その青色の瞳は怒りに細められている。そしてよく見てみれば、髪の間、犬のような耳があった。

ルーナはきよとん、と首を見た目では可愛らしく傾げ、そして一拍置いてにい、と笑った。

凄まじく悪い、悪戯をする子供のような笑みだ。ノワルーナが居れば顔を引きつらせたであろう。

「みーつけた。銀狼だ」

ルーナの知っている顔ではないが、種族は同じだ。そして顔がそっくりなのはおそらく親子か孫か、それともっと先の何かか。

ともかく、【魔獣】であることは間違いない。しかも、最も親しかった銀狼に関わる者。

「おーい、その君ー!」

「……は？ にんげ……」

「捕まえた!!」

少年のぼかん、とした声を遮るようにルーナは叫ぶ。それとほぼ同時に少年の影がぐにやりと歪んだ。ずるっ、とそれに引っ張られるようにして少年の体が倒れる。

ばさっ、と木の葉が舞う。

「な、何だ……？」

「ねえねえ、君銀狼でしょ？ あの子は生きてないとして……そう
だなあ、アングイスとかなら生きてるんじゃない？ ねえどうなの
？」

「人間が何であいつの名前知って……って、人間！」

呆然としていた少年だが、我を取り戻し逃げようとがく。だが
自身の影から逃れられるはずもなく伸ばす手は宙をきる。

ふいに、太陽が雲に隠れ、翳^{かげ}った。

『またあの蛇に会うのか……？』

「っ！？」

いつの間にかルーナの隣に黒い人影——ノクスが立っていた。少
年は驚いたようすで見上げている。

狼の自分が、気配を読めなかっただなんて。

対してルーナは肩を竦めた。ノクスは無表情ながらも嫌がってい
るようで、それに気づいたからだろう。

「いやいや、私だって嫌だよ。あの蛇性悪だもん」

『……ならいい』

「はは」

ルーナは渴いた笑いを浮かべる。あの面倒臭がりのノクスが姿を
現してまで言うということは、それほど嫌だということだ。

少年はなす術もなく、じっとしている。

「人間がこんなところに何の用だよ。喰われても文句は言えねえぞ
！」

「やっぱり五百年は大きいなあ。君、【月影の魔女】って知らない

の？」

ルーナよりも一回り小さい少年は強がったように言い、ルーナはそれを見捨てる。問いかけてみれば、より一層ルーナを睨み付けた。

「知ってるさ、それくらい！ この森のあの塔に住んでた、変わり者の人間だろ。今でも使い魔がいるから絶対に近づくなよって兄ちゃんと言ってたんだからな！」

「何で絶対に近づくな？」

「何されるかわからないから、もう本人はいないけど危険なんだぞっ！」

「……誰なのかな、吹聴した奴は。そんな悪名は轟かせてないんだけどな。ルーメと違って」

ねえ、とノクスに問うが、本人は何も言わない。肯定を述べないということは、何かしら意見があるのかも知れないが、言わないためわからない。

ルーナはその反応にむ、と頬を膨らませて拗ねる。

「ひつどい！ 私何もしないよ？ 銀狼をちょっと危険な罠に嵌めたり、いろいろあつて森の一部を燃やしたりしちゃったけど」

「……思ったよりは、酷い……」

「え？ ルーメなんかあれだよ、あれ！ 問題発言ぶつ放して殺し合いが始まりそうになったんだからね！」

拗ねている様は可愛らしいのだが、言っている内容が酷かった。それぞれ詳しい内容は聞きはしないが。

銀狼の少年は流石に話の流れからルーナが誰かわかったのか、怪訝な視線をルーナに向けている。ルーナは未だノクスに拗ねた顔を向けていたが、その視線に気付いて溜め息を吐いた。

「もおいしいや。皆死んじやってるみたいだし、【王】もどうせ代わりしてるしい？ 魔族領に行くのは面倒というか魔族の個性半端ないというか。疲れた帰る」

くるり、と二人を放置して塔に帰ろうとする。ぽかーんと口を開けている銀狼の少年をノクスは意味ありげに一瞥してから、ルーナの後を追うように振り返る。

一体何だったんだろうと呆然と考えている少年が気付いたときには、ルーナは遠くを歩いており、ノクスは消えていた。

「……闇の、臭い……？」

気配の読めなかったノクスを思いながら、少年は眉を顰めた。

3 森の様子

「——ねえ、ノクス」

ゆらり、とルーナの影が揺れる。気付いた時には隣にノクスが立っていた。

病的に白い肌と鮮血の瞳が形作る無表情。闇夜の漆黒の姿。少女の隣に立つには、ひどく禍々しい。

「……何だ」

「わかってるくせに」

ノクスの言葉を素早く遮る。ひどく鋭い、ルーナの言葉。いつもの笑顔は削ぎ落とされ、常が笑顔であるからこそその無表情は恐ろしい。

今の顔ならばなるほど、ルーナとルーメが姉弟であることも納得がいく。

『私はもう、憶えていない。【悪魔】は負の方向性の顕現としては最悪の事象だ。自我を持つが故に。一体で城が落とせるぞ』

「はぐらかさないで。私の知っていることだけ並べるつもり？」

ノクスはルーナの責めるような口調にも反応しない。ただ、何もない無表情。数秒の沈黙が重い。

しかし、周囲の空気が一気に冷めた。

「っ！」

鳥肌の立つような冷気がルーナの肌を撫でる。日は夜と大差ないほどに翳り、ひどく闇が濃い。思わず立ち止まるルーナは、ノクスを見上げた。

無表情が、見下ろしている。

『絶望を知っているだろう？ 何もできない自分の無力さを知っているだろう？』

「……ノクス……」

『……悪い』

どろ、とノクスの輪郭が解け崩れる。ノクスがいなくなったと同じ時に空は晴れ、暖かい陽気が流れた。

呆然と立ち尽くすルーナは、弱々しく苦笑した。

「あゝ……もう。聞かれたくないなら聞くなって言えばいいのに」

ひどく遠回りに、脅しのように会話を中断させたノクスに向かって愚痴る。一々自分の心を抉るような発言をせずとも、ルーナも聞かずにおくのに。

ノクスも過去に何かしらあったらしい。それが何かルーナは知らず、そしてノクス自身それほどはつきりとは覚えていない。

けれど、ひどく後悔していることだけは、わかる。

「【悪魔】について喋る気はなしねえ。私の知識にも限界があるんだけどな。さてはて、ルーメも負けちゃうくらいだし、私だったら殺されちゃうかな？」

軽い口調で独り呟く。

まるで、自分が死んでも構わないかのよう。

「ただいま。ご飯は？」

「いきなりそれかよ……」

朝とは打って変わって、半月の照らす夜闇を背にルーナは扉を勢いよく開けた。呆れた顔のノワルーナがいる。

奥に見えるテーブルにはシルワが座っており、食事が並んでいる。よく見ればルーナのものと思われる、空席に並ぶ皿。

「お？ 帰ってくるかも不確かだったのによく作ってたね？」

「流石に帰ってくるとは思ってたんだよ。まあ、確かにふらつと消える時はあるな」

傍若無人なルーナにとっては、全てにおいて興味が優先される。ノワルーナが気付いたときには消えていることはよくあるのだ。

そのため、ルーナは食事がなくお仕置きだろうな、と勝手に思っていたのだが。

「おい。今不吉なこと考えただろ」

「んう？ いやあ？」

「わざとらしい……」

しらゝ、とルーナを冷めた目で見ている。当の本人ははぐらかすように笑っているだけだ。五百年経って、ノワルーナの空気を読むスキルが上がっているんじゃないかとルーナは疑っている。

そして、今のノワルーナは客観的に見て「おかん」だ。

「さつさと手洗って席につけ。冷めてマズイなんて言いやがった
ら切れるぞ」

「はい、小姑」

「誰の所為だ、誰の！」

生活感のまるでないルーナに比べ、ノワルーナは人形であるにも
関わらず人以上に家庭的だ。元はといえばルーナの所為なのだが。

大人しく手を洗って皿の並べられた空席に着く。それはルーナ
人のためにしては、ひどく多い。シルワはもう食べ終わっているよ
うで、危なっかしい足取りで空の皿を台所へ持って行っている。偉
いなあ、とルーナはそれを見ていた。

「いただきます」

「？」

その言葉に、くてん、と可愛らしくシルワは首を傾げた。食事の
前に手を合わせる習慣はシルワにはない。

ルーナはそれを教えてもらったのだが、案外気に入っているよう
だ。もちろん手には箸が握られている。それを見て、シルワは更に
首を傾げていた。

しばらくして、ルーナの体系とは結びつかない量の食事をぺろりと平らげ、満足そうに舌を舐めていた。シルワはノワルーナのベッドで寝ている。ルーナは今後そこをシルワに使わせる気なので、必然的にノワルーナは開いている地下のベッドに寝ることになる。

……地下は魔道具が散乱していて、かなり危険なのだが。

「寝るから。おやすみ」

「ん、ああ」

二階に上がる前にルーナはそれだけをノワルーナに告げる。ノワルーナは食器を台所に持っていく途中だった。

そのように何故かルーナはふっ、と笑っていた。

4 森の狂騒（前書き）

シリアス。そして意味不。

4 森の狂騒

——暗い。

手を動かしてみれば、じゃらり、と重たい金属が擦れあう音がする。

聞こえるのはそれと、外に吹いている風の音と、そして自身の微かな吐息だけ。

……今にも絶えそうな、弱々しい呼吸。

閉じた瞼の上には、きつく布が巻かれている。あまりにもきつく、病的に白い肌に食い込むほどに。

何も見えない。何も知らない。何も許されない。

そのことを、少女は知っていた。

そのことしか、知らなかった。

ぎい、といつも閉ざされている古びた扉が軋む音がする。

それが風によるものではなく、人の手によるものだと思い付いた時、少女はひっ、と息を呑んだ。

大人の声が聞こえ、部屋に入ってくる音だけが耳に伝わる。

「ごめんなさいっ、だからやめてっ！ いや！！」

錯乱し、言葉を叫ぶ。絶叫はもはや言葉の羅列でしかない。
ノワルーナがおどおどしていると、下から声が聞こえた。

「ルーマさまっ！？」

はっ、とノワルーナがその名前に反応すると同時に、がんっ、と強い音になる。振り向けば、そこにはルーマがいた。

純白の衣を纏うルーマは、珍しく息を切らしていた。ひどく焦ったようすで、ルーナを見るなり瞳を見開く。

一瞬でノワルーナを邪魔だと言わんばかりにルーナから引き離し、駆け寄った。

「姉さん、落ち着いて？ ここには姉さんを傷つける人間なんて誰もいないよ」

「やだ、いやだっ！ もういたいのはいやぁ！！」

「うん、わかってるよ。もう誰にも傷つけさせないから。僕が守ってあげるから」

ゆっくりと優しい言葉をルーマは囁く。暴れるルーナの体を抱きしめて、自分を強く叩く腕を無視して、ただ囁く。

それはとても甘く、優しい。

ノワルーナにとって、ルーマのそのようすは異常だった。いつもの狂気はどこにもなく、ひどく優しい。正直気持ち悪いほどに。

ルーナは喉が痛むのか叫ぶのを止めている。それでもまだ取り乱している。

「ひっ、やだよ……。いたいのはいやだよ……」

「大丈夫だよ、大丈夫だから。わかってるよ」

「ごめ、なさ……ごめんなさい……」

「……謝る必要なんてないよ。姉さんは何も悪くないから」

ひつ、と息を詰まらせながら、ルーナが泣いている。ひどく弱々しいそのさまを、ノワルーナは啞然として見ていた。

こんな主の姿は、見たことがない。

反してルーメは落ち着いたようすで姉の頭を撫でていた。愛おしそうその眼がルーナに向けられている。

しばらくして、ルーナは安心したのか疲れたのか、ルーメの腕の中で眠ってしまった。

ノワルーナはちらりとルーメを見やる。同時にびくつ、と硬直した。

「……なんだい？ 今、最高に気分が悪いんだけど？」

「……いや……」

ルーナを撫でる手は優しい。だが、その表情はひどく恐ろしい。虚ろな灰色の瞳が何を映しているのか、歪に口角を吊り上げて何を思っているのか……、ノワルーナにはわからない。

いつも笑っている印象があるのだが、そこにあるのは嘲りと見下しだ。今のルーメにはそれが無い。ただただ虚ろで昏い。

『……ルーナ』

「黙ってくれないかな、闇。何も知りもしないくせにさあ、僕から姉さんを奪って」

いつの間にそこにいたのか、ノワルーナのすぐ隣にノクスが立っていた。ぎよつとするノワルーナと違い、憎悪に満ちた声を驚いたようすもなくルーメは口にする。

明確な憎悪と殺意が込められた言葉を。

ノクスはいつもと同じ無表情で、ルーメに遮られた言葉の続きを紡ごうとするようすはない。ルーメも視線は腕の中の姉に向けたまま。

「ほんつとくにむかつくよね。こういう時に限ってどうして出てこないんだい？ 君だって「これ」のことは知っているんだろう？ 独りにすれば思い出すことぐらいさあ。その人形は知らないみたいだけどね」

「……」

「返す言葉もないのかい？ はっ、笑わせるね！ —— そんな覚悟で僕の姉さんに近づくなんて」

まったく、虫唾が走るよ。

沈黙が満たす部屋の中で、誰も何も言わない。

数秒の沈黙を破るように、以外にもノクスが動いた。無感情な瞳をノワルーナに向け、それから珍しく消えることなく足で部屋を出る。

「……人形、出る」

「ルーナは……」

「……」

ずる、と影を引きずられ、半ば転がるように部屋を出された。ノワルーナは床に手突き、何とか阻止する。

顔を上げればもはやノクスは消えていた。

何が何だかわからぬまま、ノワルーナは下に下りる。傍にはシルワが困惑したようすでノワルーナを見ていた。

「……お前の朝飯作らないとな。準備しろ」

「え、でも……」

おどおどとするシルワを無視するかのように食事の準備をする。
シルワもどうしようもなくなって、それを手伝った。

「……俺の知らないことって何だよ……」

この世界は、どうしてこんなにも理不尽なのだろう。
答えなど、誰も教えてくれない。

5 森の事情

「姉さん……」

ぽつり、と眠る姉に呟く。呼んでいるのではない。
ただ、こんなときに限って傍に居られなかった自分に腹が立っているだけだ。

姉に全て捧げると決めたのに。結局このざまなのだから。

ひどく、憎い。

憎悪だけが浮かぶ。

あの村人たちは自分が皆殺しにしたというのに、それでもまだ足りないのだ。

あの時自分に力があつたなら、きっとあれほど簡単に殺してなどいないのだろう。苦痛の海に突き落としているはずなのだ。

今の力を、あの時持っていたならば。

「……世界はこんなにも醜くて愚かなのに、姉さんはまだ希望を見ようとするの？ その先にあるのは、絶望だって知っているはずなのに」

希望の背景は絶望だ。希望は絶望の中にしかない。
しかし、そもそも、希望なんて。

「他人に夢を見るのは止めようよ。どうせ、また独りになるだけさ」

——姉さんには今も昔も、僕しかいないだろう？

「う……んあ……」

そつと目を見開く。長い悪夢を見ていたように、目を開くのは億劫だ。ひどく、体が重い。

ぼうつとする。頭が働いていないようだ。

「おはよう、姉さん」

「ふえ？ は？ 何で？」

自分を抱きしめるように背後にいた弟に、疑問の声を上げる。

綺麗に傷も消え、死人色の顔に微笑を浮かべているルーマ。何故こんなところにいるのだろう、と。

「ん？ ああ、またフラッシュバックしたから」

あっけらかんとルーマは言うが、ルーマはすう、と血の気が引いていくのを感じていた。

また、か。何をしているのだろう、自分は。

「……すみませんでしたホントごめんまたアレとか鬱陶しいよねうわぁ恥ずかしくて死ぬるもうやだ所詮——夢なのに」

「うん、そうだね。耳元で叫ばれるのはちよつとキツイよね。姉さん声高いし」

自分とルーマの言葉がぐさつ、と突き刺さる。よく覚えていないが、確かにあの夢を見たような気はするのだ。そして、夢を見たのなら、必然的に。

何故忘れられないのだろう。もう誰もいないのに。死んでしまったのに。

「でも、何で？ 別に悪夢見るようなことしてないんだけど……」

「寒かったんじゃないかい？ 窓も開いてるしね」

「高がそんなことで……」

ずーん、と珍しくわかりやすく落ち込んでいる。

アレはルーナがルーマに抱いている負い目の一つなのだから。忘れる為に「今のようになった」のに。

「……別にいいんだよ。ずっと、姉さんの傍にいてあげる……」
「……」

そう、それだ。それが嫌だったから、今のようになったのに。それなのに、やっぱり忘れられなくて、独りでは生きられない。

求めているのはルーマでなく、ルーナの方なのだと思っていた。ルーマに甘えて気付かないふりをしていても。

けれど、俯いているルーナは見えていなかった。

呟いたルーメが、狂氣的な笑みを浮かべていることを。

そうやって、追いついていくことを。

そして、昔のように傍に居るのは自分だけになればいいと、そう思っていることを。

ルーナは気付いていない。

「おはよー」

何事もなかったかのようににっこりと微笑んでいるルーナに、ノワルーナは何とも言えない表情をしていた。まるで仮面を被っているようで気味が悪い。

その横ではシルワがせっせと食器を片付けていた。心配しているようだったが、何も言わずにいる。

ノワルーナはふと見たルーナの後ろにいるルーメと目が合い、挑発的な笑みに腹が立つ。しかし今更怒ったところで反省などしないのだから、堪える。

「……飯抜き」

「え。酷い！」

「材料がない。ここが【狭間の森】だってわかってるんだろっな？」

む、とルーナは顔を顰める。確かに魔力の多い土地柄、育つ植物は異様だし、川の魚は魔物と同レベルである。昔食物を栽培してみたら人食い花になったことも忘れてはいない。

ノワルーナに食事は必要ないし、昔から家とは言っても外出ばかりしていた。他の土地では適当にノワルーナに作らせていたのだ。

「そいつが食った分で最後だ。残念だったな」

「え、あの、すいません……！」

「貴女は悪くないけど。あゝ、適当にどこかで食べてこようかなあ？」

本当は無理矢理ノワルーナに取ってこさせるといふ選択肢もあるのだが、今のルーナは出かけたい気分らしい。

思い立ったが吉日、と言わんばかりに欠伸をしながら外に向かう。

「俺はいらねえか？」

「うゝん。いいよお。目立つしー」

「……お前がな」

呆れ顔のノワルーナに確信犯の笑顔を向ける。漆黒の長い髪が開いた扉から吹き込む風で摩ないた。逆光に浮かび上がる影は、まさしく漆黒。

そして、黒の隣で同じく風に翻ひるがえるのは純白の衣。

「え、ルーメも来るの？」

「当たり前だろう？ 姉さんがいないこの塔にどうして僕がいる必要があるのさ？」

「んゝ、シルワは？」

いきなり話題に出されたシルワはぎょつ、とルーナの方を向く。そして、ルーメもシルワに目を向けた。今まで笑みを浮かべていた瞳がすつ、と細められる。値踏みするような、拒絶されるような冷たい視線に、気配しか感じられないはずのシルワでさえ息を詰まらせた。

シルワはその視線を知っている。昔拾われたそのときと同じ瞳。

——自分が使えるかどうか、利用価値があるかどうかだけの、道具に向ける視線だと。

「別に、どうでもいいかな。殺すも生かすも姉さんの好きにしたらいいよ」

きよとん、とそれだけ。

先ほどの会話がなかったかのように、ただ、それだけを答えとして姉に言う。

そして、シルワも同じだった。

——捨てられた。

「……あゝ、そう。じゃあノワよろしく！ 多分数日空けると思うからどこでも行って、帰ってくるまでに私がここで生活できるようにすること！ その子も守れるなら連れてっておっけー」

「だからな？ ややこしいことを全部丸投げにするのはいい加減止めろって言うてんだろ……」

「私に空気読めとか人の心理理解しろとか無理！」

「俺が人形だつて忘れてねえか？」

「え」

沈黙が数秒二人の間に漂った。

ルーナはへらへら、と笑って何事もなかったかのように塔を出て行く。ノワルーナは空気を読んで何も言わなかったが、確実に呆れていた。

ルーメはいつものようにルーナを追いかける。

シルワは、その背を見えないはずの視線だけで追いかけて、遠くに行ってしまったと感じると振り返ってノワルーナを見た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6782q/>

古の魔女

2011年10月10日10時48分発行